『ヤマト双國論』

洋夏晴崇（ようかせいしゅう）

1. 序文

「卑弥呼」
「邪馬台国」

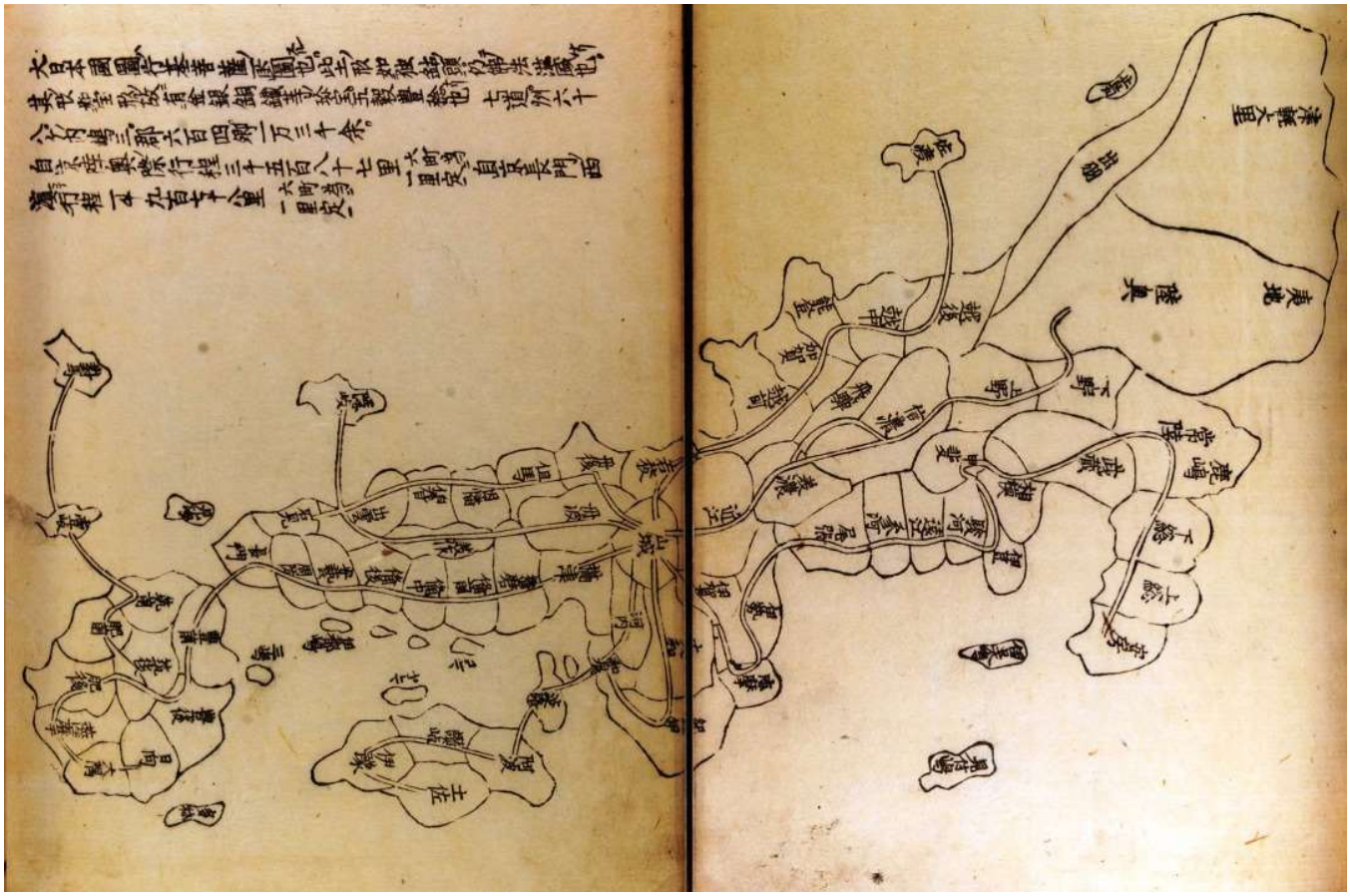
　この言葉に歴代の研究者達が何百年頭を抱えてきたのかは計り知れない。私は偶然にも従来と異なる観点から真実に辿り着いたため、ここに書き残す。この文章を以ってすべての謎を終結させる。

2. 糸

きっかけは実に些細なことだった。某有名動画サイトにて、

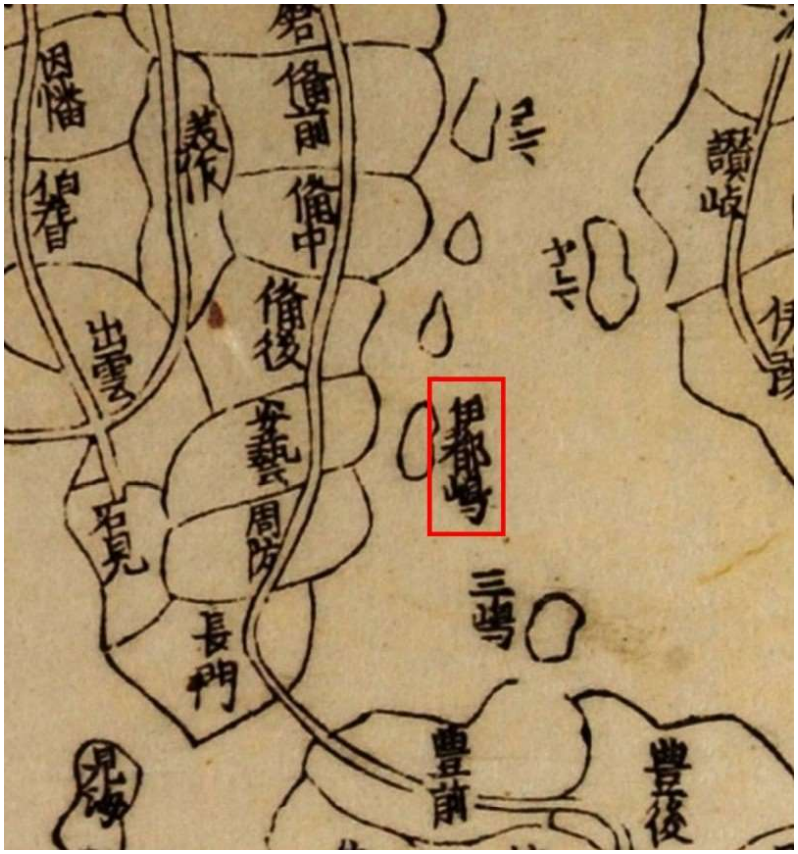
「行基図（ぎょうきず）」

という奈良時代の高僧によって描かれた日本最古の地図の解説動画があった。
これがその日本最古の地図である。



伊能忠敬が江戸時代に現在と遜色ない精度で日本地図を書き上げたことは有名であるが、奈良時代に書き上げただけあって、精度的には劣り、それぞれの国の形も丸みを帯びたデフォルメ的なものだ。
しかし、特徴を掴んでいる地域も多く、当時の国と国の並び方や距離感を知るには充分過ぎる代物でとても 1200 年以上前に描かれたとは思えない。
事実、その時代にはそぐわない地名もあるそうで、行基本人が書いたものではないとの説もある。
しかし、地図作りは膨大な時間を要するため、本人の死後も後世の人々が作業を続け、何度も模写を行いながら地名を修正していったとすれば、なんら不思議ではない。

これを眺めているうちに、ある一つの島に目が留まった。



「伊都嶋（いとしま）」

瀬戸内海に浮かぶ島のようだが、この名前に見覚えがあった。
ご承知のとおり、魏志倭人伝（ぎしわじんでん）において、この文字は邪馬台国までの道筋を示す最重要通過地点の一つ、

「伊都国（いとこく）」

この漢字表記と同様なのである。しかし、伊都国はその名称から福岡県糸島市周辺にあったとする研究者が大半であり、案の定、どの説においても瀬戸内海にあるなどという記述はない。
だが私は、常識とされている事柄でも自分で調べてからでないと納得できない性分だ。

「奈良時代の地図にこんなにハッキリ書かれているのに無関係だなんてことが、あり得るのか？」

そう思った私は、これまでの邪馬台国への定説を改めて確認したところ、伊都国への新たな道筋の発見に至ったのである。

3. 常識の隙

まず、魏志倭人伝で使用されている距離の単位……「里(り)」

これについては、近年の研究者によって古代中国で用いられていた長さの単位である「短里(たんり)」が、約 70～80m であるとのことだったため、ありがたく使わせてもらった。

ここで最も名称と位置関係がはっきりしている対馬北端と壱岐間の距離を測定すると、約 80km となる。一方で魏志倭人伝ではこの間の距離を約 1000 里としており、針路は「南」とあるため、ほぼ違和感はない。

後は距離と方位から邪馬台国までの道筋を割り出せば良いだろう。

ここで「伊都国＝福岡県糸島市周辺」という説の海上移動経路を改めて確認した。

ところが、魏志倭人伝では、壱岐－松浦 (旧末盧国(まつろこく)とされている)の距離が対馬-壱岐間と同様に 1000 里あまりとされているにも拘らず、対馬－壱岐の距離に比べてあまりに近過ぎる。

他にもいくつかの経路図を確認してみたが、中には対馬南端から壱岐までの距離を約 60km(750 里ほど)とし、壱岐－松浦の距離の短さを違和感なく、説明しようとするものもあった。

しかし、その場合は対馬から壱岐へ「南」に針路を取っているのではなく、「東南東」に向かうことになるため、針路も距離も両方に矛盾が生じているのである。

この疑問についての解説としては、

「当時は正確な針路が分からず、距離も正確に測定できないため」

とあった。

しかし、元外航船の航海士として言わせていただくなら、それは何も目標物のない大洋航路にのみ、当て嵌まることである。このように近隣の島が見える範囲で距離はもちろん、70°近く針路を間違えるのであれば、即刻船乗りを辞めるべきだろう。

中には魏志倭人伝の著者が意図的にデタラメを書いたとの理論もあったが、私には理解不能である。

私が著者なら、後の渡航者がそれを信じて目的地に辿り着けなかった場合、皇帝から自分、もしくは一族郎党に死罪を言い渡される恐怖からとてもそんな真似はできない。

とにかく、このままの進路だと魏の大型船が瀬戸内海に行きつくことはまずあり得ないため、私は再度、魏志倭人伝の記述を見た。

對馬(つしま) → 南に海を千余里渡る → 一大國(いちだいこく)(壱岐)
一大國(壱岐) → 海を千余里渡る → 末盧国(まつろこく)……

ここで私は立ち止った。

対馬から壱岐に向かう際には明確に針路は「南」とあるが、壱岐から末盧国に向かう記述には針路が書かれていないのである。私はこれが抜け道だと閃いた。

こうなると先ほど感じた壱岐と松浦が近過ぎる疑問は確信に変わる。

その距離はどう見積もっても 40km ほどであり、1000 里＝80km の半分ほどで明らかにおかしい。では、南でないならどこへ向かったのか？

瀬戸内海に近づくのであれば、針路は一つしかない。

以下の図上、紫色の矢印が示すように、壱岐から東北東に向かうと山口県（旧長門(ながと)）の西端に当たる。

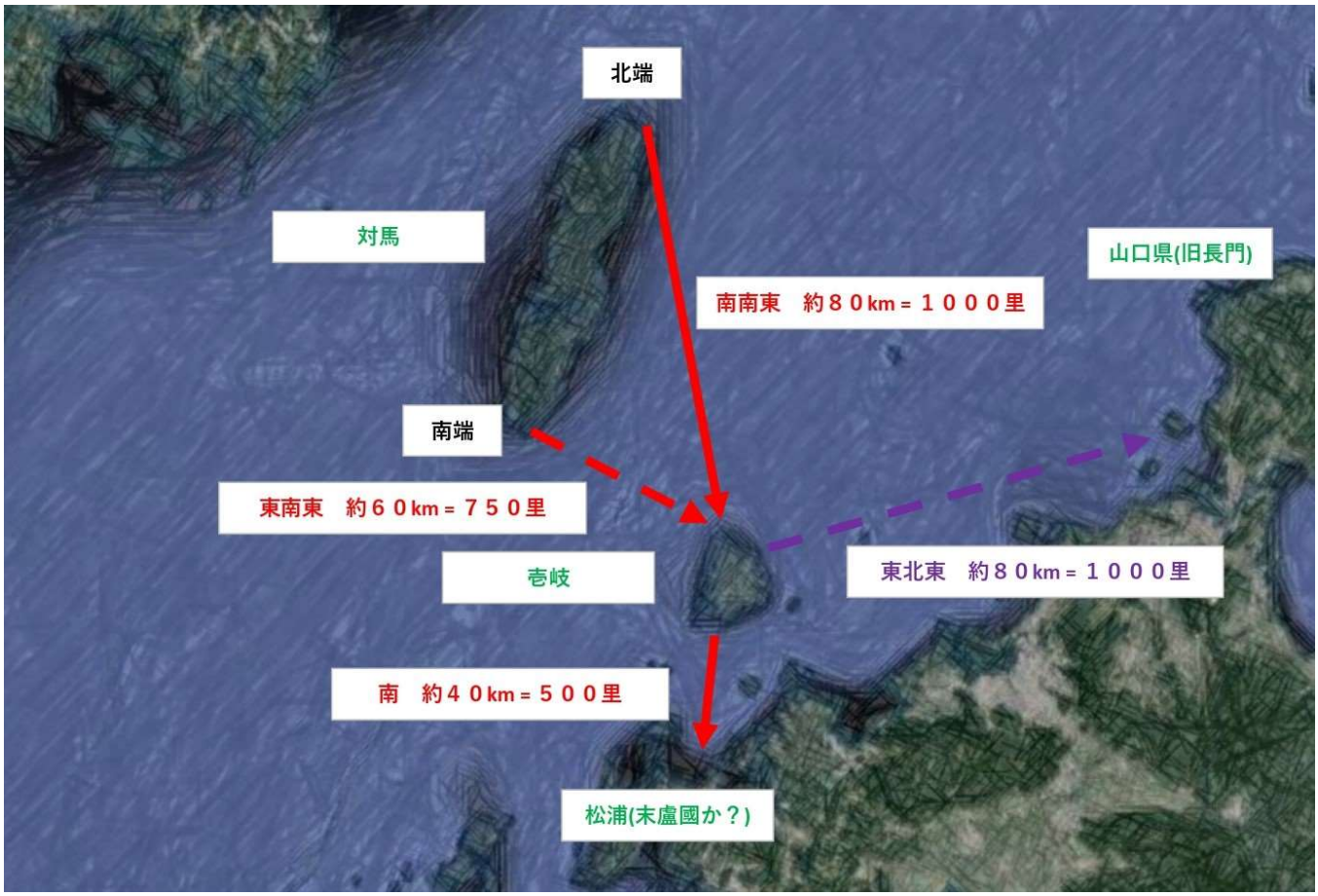
距離は直線で 80～90km……1000 余里ということは 1000 里を少し超えても問題ないだろう。

これなら対馬－壱岐間の距離とも整合性が取れる。

こうして私の頭の中には、

「長門＝末盧国」

の構図ができあがったのである。



このように描くとおそらく、以下のような疑問が出るだろう。

① この進路なら、なぜ対馬から長門に直接針路を取らないのか？
② 山口県で「マツロ」に似た地名はない

①については直線距離で 140km ほどとなり、直線とはいえ大洋航路になるため、針路的にも誤差が大きくなる。さらに海中落下でもして船に置いて行かれれば、自力で海岸には泳ぎ着けず、確実に死ぬ。一方、壱岐を経由すれば、距離はやや長くなるが、安全で食料と飲料水の補給も可能。

②については確かに「マツロ」に近い名は見つからなかった。
漢字として酷似している末廣（すえひろ）という名の平安時代から続く神社はあったが、根拠としてはやや薄くなる。
しかし、そもそも松浦（まつうら）がマツロの名残という説も中々に強引である。私の考えでは、長門は中国地方の最西端に当たることから

「末路（まつろ）の国」

と呼ばれた時期があったのだろう。
もちろん、あまり良い由来とは思えないため、自国民はそのように呼ばず、周辺国からはそう呼ばれていたとご理解いただきたい。
このように私は新しい伊都国への可能性を見出したのである。

4. 陸行

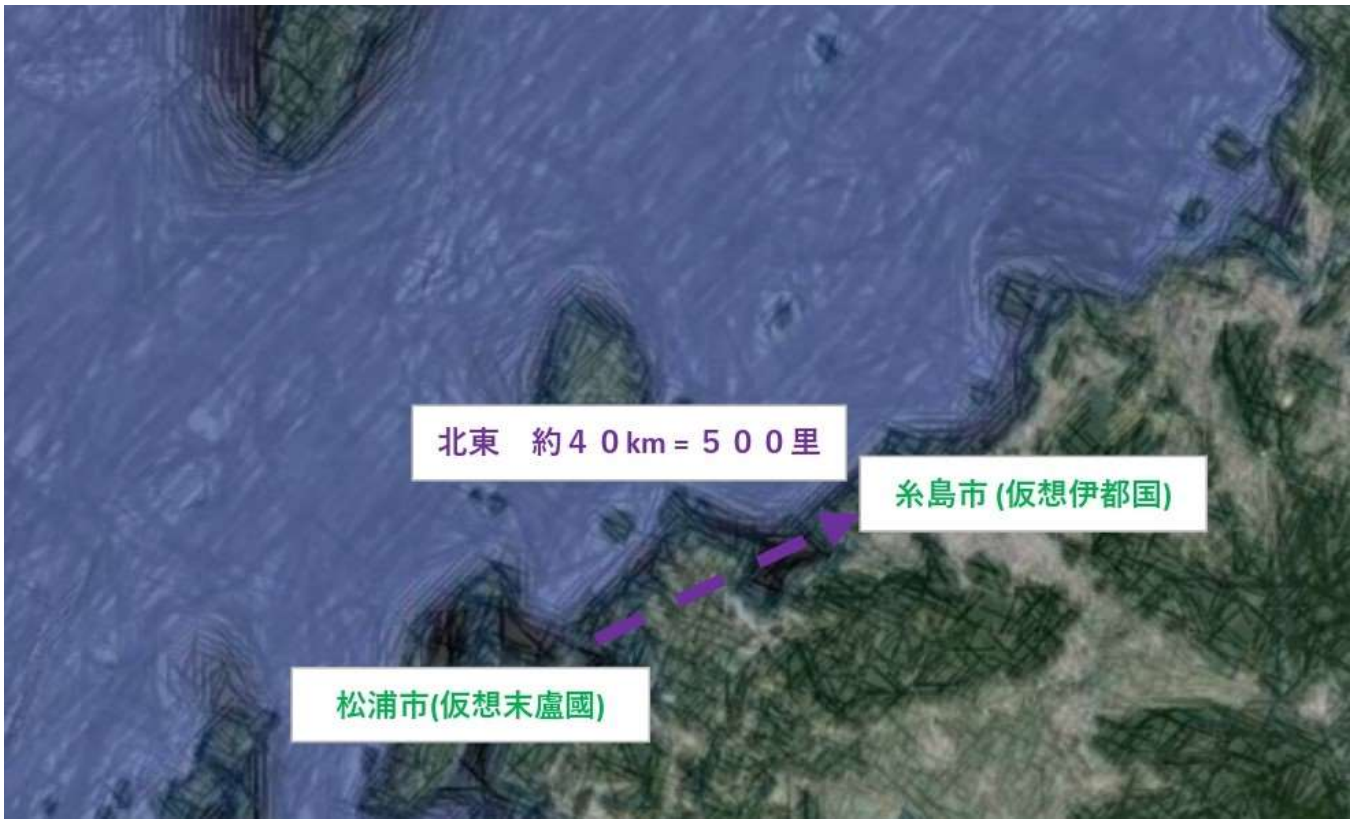
次に末盧國と想定した長門から伊都国への移動についてだが、ここで魏志倭人伝の記述を再確認する。

末盧国 → 東南に陸行五百里 → 伊都国

まず十六方位に「南東」はあるが、「東南」という表記はない。しかし、これは先に東と書かれていることから、現代でいう「東南東」のことだろう。

この記述について、従来説では長崎県松浦市周辺（仮想末盧國）から福岡県糸島市周辺（仮想伊都国）の距離が約 40km（500 里）としている。

距離については百歩譲るが、その進行方向は東南東ではなく、どう見ても北東方向である。



この相違についても当時は方位測定法が未熟であるとか、前述した魏志倭人伝の著者が細工したという意見が主であるようだ。

これに対して、私の考える移動経路を述べる前に、まずこの記述の注意点を挙げておく。

①陸行とは「陸上を徒歩で進む」の意味とは限らない

従来の研究では、この部分の「陸行」を「船を降りて徒歩で進む」と解釈しているのである。
これは後半の内容に関わるが、確かに魏志倭人伝ではその解釈次第で、船を降りて、陸を進んで、また船に乗って……と何度も繰り返しているように勘違いさせる記述がある。しかし、それは現代的過ぎる考え方だ。例を挙げると今の時代であれば、

出発地 → 徒歩 → 駅 → 電車 → 駅 → 新幹線 → 駅 → 徒歩 → バス停 → バス → 目的地

というのは珍しくない。
ところが、この時代において魏の使者に船を降りてもらい、陸上を数日歩かせ、次の地点では渡し舟が用意してあり、それに乗ってさらに最寄りの港に向かい、そこで下船してさらに徒歩で案内するなどと、そんな面倒な経路で魏の大使を邪馬台国へお連れしたとはとても考え難いのである。
せいぜい目的地最寄りの港まで魏船で向かい、港から徒歩数日で邪馬台国に到着というのが関の山だろう。つまり、

「末盧国 → 東南に陸行五百里 → 伊都国」

というのは

「末盧國の東南 500 里先に伊都国がある」

という位置関係を説明しているだけであり、

「末盧國で船を降り、東南 500 里を歩いて伊都国に向かう」

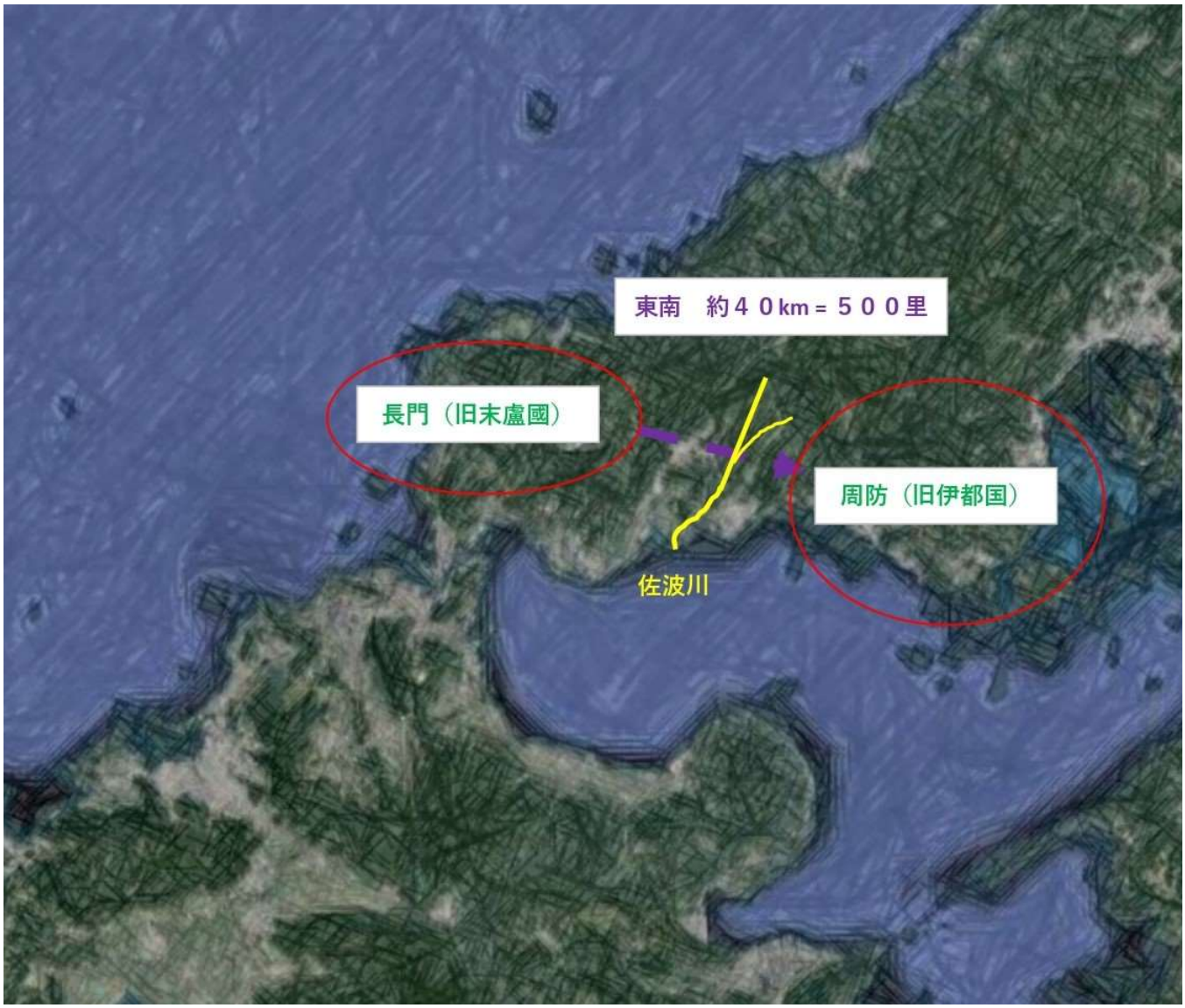
というように移動方法まで指定しているわけではないことを指摘しておく。

②この時代の「国」はもっと大きい

既存の資料を見ると、従来の研究では末盧國にしろ、伊都国にしろ、この時代の「国」を現代でいう「市」程度の広さでしか考えていない。

これは魏志倭人伝に登場する邪馬台国を始めとした各国を九州地方内部の国と考えたいという願望によるものだろうが、大きな勘違いである。

実際にはこの時代の「国」はもっと大きく、島国であれば海そのもの、内陸の国であれば大型河川が国と国の国境線の役割を果たしていたのだ。そう仮定すると、私は伊都国の位置をこのように導き出すことができた。



末盧國を長門周辺とし、そこから東南に40㎞(500里)先にあるのは、かつての周防(すおう)周辺……ここが真の伊都国である。

当然ながら、魏の使者が、長門から船を降りて徒歩で向かったはずはなく、現代でいう関門海峡を通って、陸沿いに航行して直接到着したのだ。

その根拠として、有名な厳島(いつくしま)神社のある厳島はかつて「伊都岐(いとき)島」と呼ばれており、平安時代から海上交通の拠点とされてきたのは周知の事実。

これにて行基図に記されていた「伊都嶋」の名称ともめでたく一致したのである。

ちなみに伊都岐島の「岐」の文字は「境目」の意味を持ち、この島が伊都国の東端であったことが分かる。

魏志倭人伝によると伊都国は邪馬台国の傘下にあり、税関と関所の役割を果たしていた。

海外から船舶が来る場合、瀬戸内海奥へ最短で向かうには必ずここを経由しなければならないため、仮にそれが敵船襲来だったとしても、邪馬台国へ非常事態を即座に報告に行ける計算されつくした配置。

つまり、邪馬台国はこの先にある。

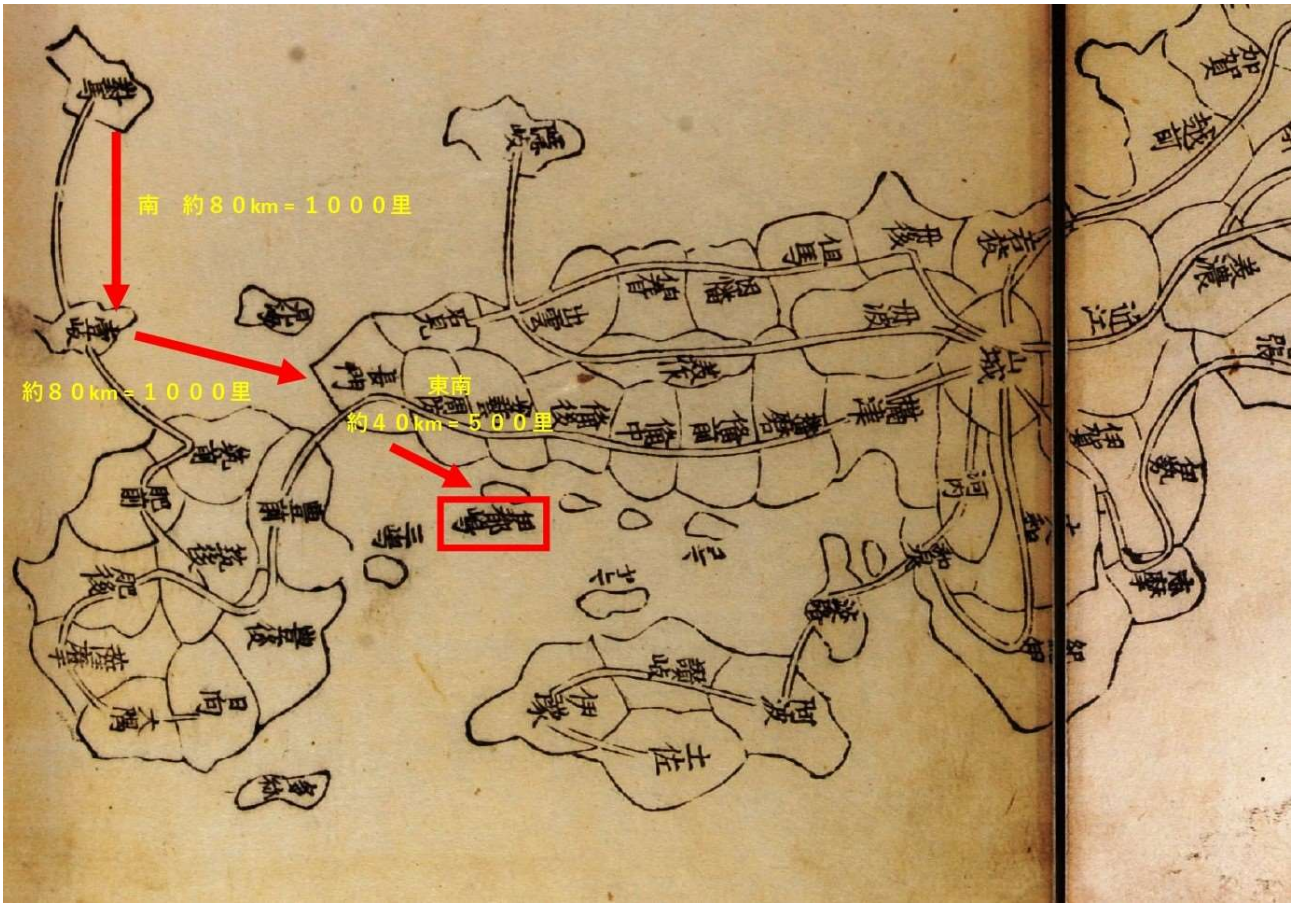
こうして私は何百年の間、九州の一部とされてきた伊都国を瀬戸内海へ引っ張り出したのだった。

5. 到達

ここで魏志倭人伝に記述されている邪馬台国への経路全てを以下に記述する。

①狗邪韓国（くやかんこく） → 海を千余里渡る → 對馬
②對馬 → 南に海を千余里渡る → 一大國
③一大國 → 海を千余里渡る → 末盧国（長門）
④末盧国（長門） → 東南に陸行五百里 → 伊都国（周防）
⑤伊都国（周防） → 東南に百里 → 奴国（なこく）
⑥奴国 → 東に百里 → 不弥国（ふみこく）
⑦不弥国 → 南 → 投馬国（つまこく）　＞＞＞水行二十日
⑧投馬国 → 南 → 邪馬台国　＞＞＞水行十日、陸行一月

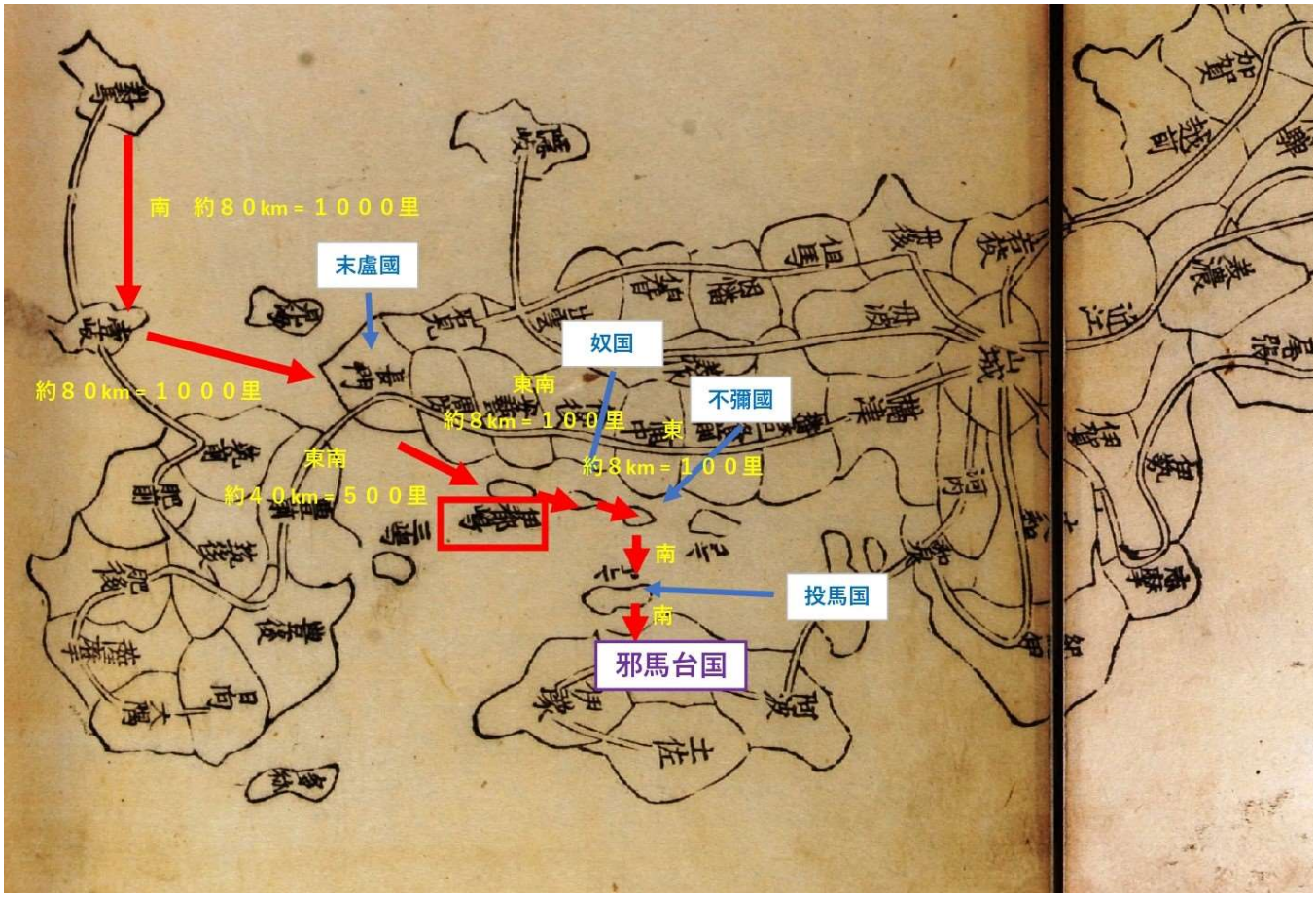
私は④に該当する伊都国までの経路を現代の地形図を使用して解説してきた。
しかし、私が実際に邪馬台国の位置を特定できたのは、やはり行基図のおかげである。 今一度、行基図を以下に示す。



驚くべきことに①から④までの経路は、その距離や針路において魏志倭人伝の解説とほぼ一致した。

現在の地図に比べて精度には欠けるものの、ちょうどよく丸みを帯びたデフォルメのおかげで、伊都国までの道筋を見つけ出すことができたのである。

よって、⑤からも行基図をそのまま使用して魏志倭人伝の解説どおりに進行した結果、私は邪馬台国の場所を以下に特定した。



九州でも畿内でもなく、歴代の研究者がほぼ論じることのなかった場所……現在の香川県にあたり、かつて**「讃岐（さぬき）」**と呼ばれたこの地こそが、邪馬台国との結論となった。

ただし、これまでの解説だけでは、讃岐が邪馬台国だったと素直に納得する者はいないだろう。なぜなら、私はまだ以下の重要事項を説明していないからである。

A. ⑦の文末にある「水行二十日」は何か？

「不弥国から投馬国まで南に水行二十日」

「水行～日」という表現は、ここで初めて出現しており、魏志倭人伝を正しく読み進むことができれば、この 20 日間とは

「大陸出発から投馬国までの総航海日数」

を示すと自ずと分かる。
海を越える長期航海がここで終了したからと考えれば、ごく自然な文章の流れだ。しかし、前述した④の

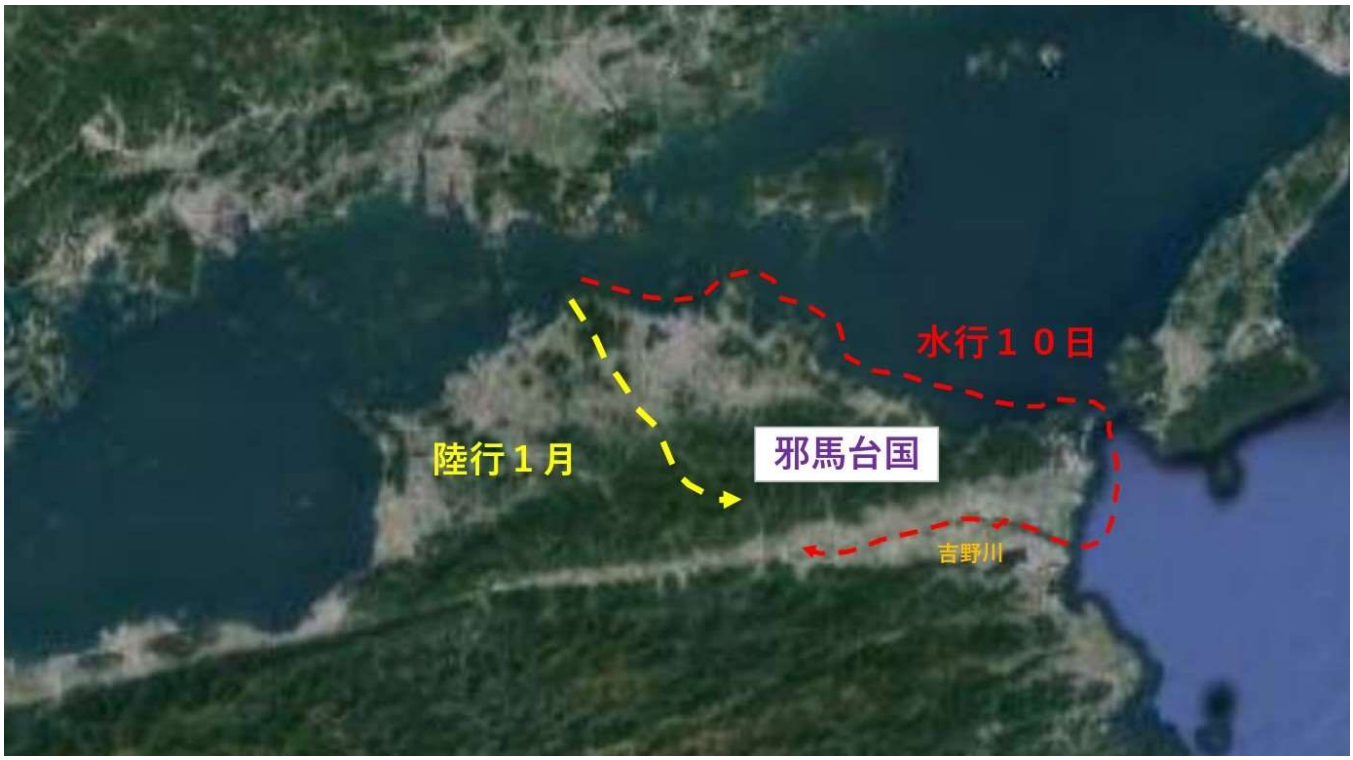
「末盧国から東南に五百里歩いて伊都国へ向かう」

という誤った既成概念が邪魔をするため、こんな容易な解答に何百年も辿り着けなかったのである。
繰り返すが、魏の使者は大陸から投馬国に至るまで国と国の間を徒歩で移動するなどという行動は一切取っていない。
この場合、不弥国 ― 投馬国間の距離表記がなくなるという疑問が出るだろうが、これについては以下の図を見ていただきたい。

これを見ると分かるように不弥国、投馬国、さらには邪馬台国間と思われる海域は、島と島の間隔が非常に狭小なため、「南」という針路のみで距離は記述しなかったのだ。

B. ⑧の文末にある「水行十日、陸行一月」は何か？

「水行十日、陸行一月」という記述だが、これは以下の経路を示している。



この記述の正しい解釈は、

「投馬国から邪馬台国まで水行なら 10 日、陸行なら 1 月」

である。おそらく邪馬台国の使者は魏の使者に対して、

「ここから邪馬台国までは船で北岸を廻り、吉野川を遡上すれば 10 日で到着します。上陸して徒歩なら 1 月はかかります」

と説明したのだろう。
その場合、当然魏の使者は前者を選ぶため、魏船は吉野川を遡上して邪馬台国に向かったのだ。
水行 10 日は少し長過ぎると感じるかもしれないが、吉野川を遡上するにはそれぐらいの時間が必要だったのだ。そう考えれば、これまでの単純な距離表記から日数表記に切り替えたのも納得できる。

ちなみに⑤に該当する伊都国から東南百里にある奴国は現在の愛媛県となる伊予(いよ)に該当する。
魏志倭人伝には「奴国には二万余戸がある」との記載があるため、これぐらいの規模の広さは必要だろう。
その根拠として、愛媛県松山市の西端に怒和島(ぬわじま)という島を発見した。
これは奴(な)から怒和(ぬわ)に転じたもので、「怒」の漢字から「心」を取れば、「奴」の漢字となる。このように発音と漢字から判断してほぼ間違いない。
その先の不弥国については、小さな島がばらついているために、国境線がどこで区切られていたのか正確に把握するには至らなかった。名称もこれぞというものが見当たらないため、特定できなかったのは残念である。しかし、問題は次の投馬国。
当初はこの国は不弥国と同じく、この狭い海域の島のどれかと考えていた。しかし、魏志倭人伝において

「投馬国には五万戸がある」

との記述を考えるとさすがに狭過ぎる。
おそらく、魏志倭人伝における投馬国とは讃岐の北側で、邪馬台国は讃岐の南側を示すと思われる。
その根拠として、讃岐の北側には日妻山(ひづまやま)や妻之木(つまのき)神社、引妻池(ひきつまいけ)とやたらに妻(つま)という名の場所が多く見られるためだ。
しかしながら、私はこの投馬国を含めた讃岐全てが本来の邪馬台国であり、とある事情で魏の使者にはこの北側を「投馬国」という別国であるように説明したと考えている。
なぜそのような偽りを述べたかについての解説は後章に回す。
さて、ここまで説明しても讃岐が邪馬台国だったと納得する研究者は少ないだろう。逆の立場であれば、私も絶対に信じはしない。
ただ、かつてここに七万戸という巨大な女王国があったとすれば、必ず歴史に名が残っているはずである。
そう確信した私は、この周辺の神社を中心に伝説や逸話を調査した結果、偶然の一致とは思えない女性の名に驚愕した。
それこそが、卑弥呼の墓と噂になっている奈良県纒向遺跡の箸墓古墳に眠る巫女……**「倭迹迹日百襲姫命(やまとととひももそひめのみこと)」**だったのである。

6. 女王の輪郭

「倭迹迹日百襲姫命こそが、卑弥呼である！」

と主張すると、やはり畿内説かと思われるかもしれないが、全くの誤解である。

まず、古事記と日本書紀（以下、記紀と称す）にはどのように彼女について書かれているか、それを次に記述する。

１．第７代孝霊天皇の皇女
２．弟は桃太郎のモデルとされる吉備津彦命と稚武彦命
３．大物主神（三輪山の神）の妻 → 人の世では生涯独身
４．蛇となった大物主神に驚き、その拍子に箸で陰部を突いたために死去

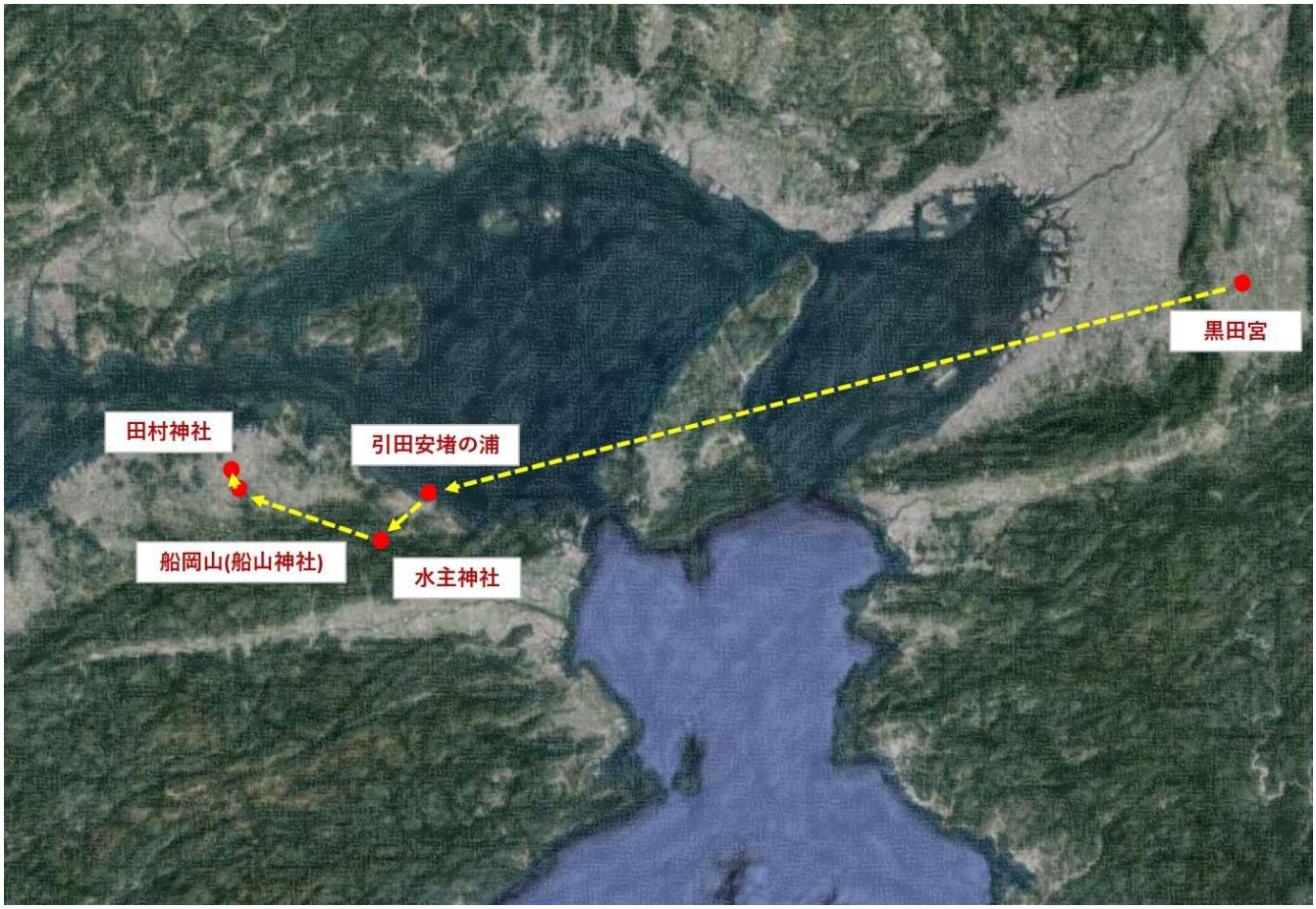
以上、記紀においては大方このような内容である。しかし、讃岐に点在する神社には彼女の逸話が驚くほど明確に残されていた。それは以下のとおりである。

①黒田宮にて、幼き頃より、神意を伺い、まじない、占い、知能に優れた
②7 歳のとき、人との交流が少ない黒田宮を出て、船で引田安堵の浦に着いた
③8 歳のとき、水主里宮内（水主神社）に就任し、成人までこの地に住んだ
④土地の人に米作り又水路を開き、雨祈で、雨を降らせ、文化の興隆を果たした
⑤船岡山（船山神社）に移り住む
⑥田村神社に移り住む

大まかに言えば、このような内容である。

黒田宮とは、彼女の父親である孝霊天皇がおわしになった旧大和国城下群の黒田廬宮であり、現在の奈良県磯城郡田原本町に当たる。彼女はここから、若干７歳の時に親元を離れて讃岐に渡ってきたのだ。

彼女の足跡を図に示すと以下のとおりである。



「幼き頃より、神意を伺い、まじない、占い、知能に優れた」

との記述は、卑弥呼が行ったという「鬼道」に共通しており、彼女には弟がいて政治を補佐したのも有名な話だが、これも吉備津彦命、または稚武彦命に重なる。

ところで、箸墓古墳に眠るとされる倭迹迹日百襲姫命が卑弥呼であるという説を始めて提唱したのは、明治時代の考古学者、笠井新也（かさいしんや）氏 （1884～1956 年）である。調べてみると彼は徳島県の出身であり、讃岐は目と鼻の先にあることから考えても、おそらく幼少期から彼女の逸話を知っていたと思われる。

彼は 1924 年に「卑弥呼即ち倭迹迹日百襲姫命」という論文を発表したが、その根拠を簡単にまとめると以下のように述べている。

（１）卑弥呼はヒメミコトの意味で倭迹迹日百襲姫命に一致する
（２）どちらも鬼道を扱った
（３）どちらも生涯独身
（４）どちらも弟がいて、国政を補佐している
（５）どちらもたった一人の男が給仕を担当

以上より彼は「倭迹迹日百襲姫命＝卑弥呼」と提唱した。
ここまで共通するなら証明できそうなものだが、主に以下の理由で否定されたようである。

A. 時代が異なる（後年に箸墓古墳の時代が違うと指摘）
B. 彼女は独身（三輪山の神の妻）だったが、身近にいたはずの崇神天皇の記述がなく、「女王」を名乗るのはおかしい

Aについて、箸墓古墳が倭迹迹日百襲姫命の墓であることは日本書紀に記されている。その上で、C14年代測定法の結果からこの古墳が、卑弥呼が亡くなったとされる時代 （240年～260年）に一致したため、

「倭迹迹日百襲姫命こそ、卑弥呼だった！」

と、とある歴史博物館からも10年以上前に発表された。しかし、

「測定方法が信用できない」
「発掘される土器が時代に合わない」

などと、大衆雑誌も巻き込んで大々的に批判されたとのことである。発表した当時の館長の無念は計り知れないだろう。
私は確率的にそんなタイミング良く測定ミスが発生するとは思えず、この度魏志倭人伝より導き出した経路とも一致したため、その時代測定は正しかったと確信している。二つの全く異なる方法で導き出された解答が、直線のように交わって偶然に一致するなど、早々あるものではない。
しかし、Aはともかく、Bの指摘については、畿内説にも言い逃れできない大きな矛盾があるのは確かである。
よって、私は次章からこのBを塗り替える真実を魏志倭人伝、記紀、そして、讃岐に残された社伝から推察し、提唱してゆく。

7. 女王国の証明

まず、香川県（旧讃岐）が本当に邪馬台国で間違いないのか……

幸いなことに魏志倭人伝には大陸からここまでの行程だけではなく、その風習や文化、環境に加えて、周囲にある国々についてもかなり詳細な記述がある。よって、それらを元に多角的な検証を試みたところ、驚くべき結果となった。

①カササギ

魏志倭人伝において、邪馬台国には「鵲（かささぎ）がいない」の一文はかなり有名な部類と思われるが、その生息区域を調べたところ、以下の図となった。

こちらは国立環境研究所のデータを参考に作成したが、赤色は移入分布、灰色は在来かどうか不明とのこと。一目で分かるように香川県には生息がいまだに認められていないのである。

②真珠

魏志倭人伝において、邪馬台国では「真珠が取れる」とあるが、香川県さぬき市志度には「真珠島」があり、日本書紀にもそのエピソードが残されている。

③丹（辰砂）

魏志倭人伝において、邪馬台国では「山で丹が取れる」とある。丹とは辰砂または水銀朱とも呼ばれ、お隣の徳島県若杉山辰砂採掘遺跡が国内唯一の生産地だったとされている。しかし、近年香川県の旧練兵場遺跡からも発掘された。これに関する資料にはなぜか「これは中国産である」と断言されているのだが、根拠が一切示されておらず、私は単純に地元産ではないかと推測している。

④狗奴国

魏志倭人伝において、邪馬台国の「南には狗奴国がある」と書かれている。

香川県（旧讃岐）が邪馬台国であるとするならば、この国は徳島県（旧阿波）となる。しかし前章で述べたとおり、私は、当時の内陸の国々の国境線は大型河川だったと考えているため、当時の邪馬台国と狗奴国の国境線はその間にあった吉野川と認識すれば、邪馬台国の領地は吉野川以北（讃岐＋阿波の一部）とご認識いただきたい。

さて、愛媛県の怒和島が奴国の名残だったように、ここにも狗奴国を連想させる神社や地名がないか探したところ、玖奴師神社という場所を発見した。この神社も相当に古いものらしく、名の由来が分からないほどだが、狗奴の名残と考えられる。

⑤侏儒国

魏志倭人伝において、邪馬台国の「東南には侏儒国がある」と書かれている。

位置的にこの国は和歌山県 （旧紀伊）となるのだが、現時点でその名を彷彿させる神社や地名は見つからなかった。

しかし、この国にはもう一つ面白い特徴があり、身長がわずか 80～100㎝ 程度しかない人々が住んでいるとの記述がある。さすがにこれはないだろうと思っていたが、万一を考えて和歌山県にそのような伝承が残っていないか調査を行った。

その結果、なんと和歌山県東牟婁郡にあった旧高田村に「かしゃんぼ」と呼ばれる 6、7 歳程度の背丈の妖怪伝説が残っており、あの水木しげる氏もこの妖怪を取り上げているほどである。

その話の構成は河童に似ているのだが、「青い服を身に付けている」という妙に具体的な特徴が語り継がれており、単なる作り話とは思えない。

これは私の推測だが、1700 年以上前のこの地には、中央アフリカに住むという身長 150㎝ 程度にしか達しないピグミー族より小さな人類が住んでいたのではないだろうか？　仮に彼らの遺骨が見つかったとしても、子供の骨と間違われて特に重視されてこなかったと考えれば筋が通るのである。

そもそも「侏儒」という言葉は「小人」の意味であり、ひいてはおとぎ話の「一寸法師」を示す言葉とのこと。そう考えるとこの国名も末盧國のように周辺国がそう呼んでいたと推測するのが自然だろう。

⑥黒歯国（くろはこく）

魏志倭人伝において、「侏儒国のさらに東南には黒歯国がある」と書かれている。

ご存知の方もいるだろうが、古来日本には「お歯黒」という風習があり、当時の女性はその歯を黒く染めていた時代があった。

和歌山県の東南というと、三重県以東になるだろう。

私はこれについても調査を行い、お歯黒の発祥はどこなのかを探った。

すると思ったとおり、西暦 938 年に発行された和名類聚鈔（わみょうるいじゅうしょう）という日本最古の辞書に記述を発見した。

「黒歯国 、東海中にあり。その土俗、草を以て歯を染むる故に曰く。歯黒は俗に 波久路女と云ふ。婦人黒歯具有り。故にこれを取る」

と一致したのである。

いかがだろうか？

卑弥呼であると明治時代から可能性を疑われた倭迹迹日百襲姫命の名前と C14 年代測定法により推定された時代。

そして、魏志倭人伝に記されたその地までの行程、動物生態、特産品、発掘物、周辺国の位置関係及びその特徴の一致……全ての解答の直線が一点に交わるように、讃岐の地こそ、邪馬台国であると指し示しているのだ。

次章からはより深く邪馬台国の真実について論じてゆく。

8. ヤマト双國論

初めに倭迹迹日百襲姫命（以下、卑弥呼）は大和国出身の皇女であり、讃岐出身者ではない。
そして、現香川県に点在する神社に残された社伝から彼女は大和国にて政治を行ったのではなく、讃岐に移動してからその地で政治を行ったことが明白である。よって、現奈良県＝大和国＝邪馬台国の畿内説は成立せず、代わりに以下の構図が成立する。

大和国に天皇陛下……現奈良県
邪馬台国に卑弥呼たる女王……現香川県

つまり、この時代には現奈良県と現香川県の双方同時に国家が存在したのである。当然、邪馬台国は大和国の傘下だが、正しくは「分身」と言った方が的確だろう。
しかし、魏に対して邪馬台国が独立国家であるように装っていたのは、魏志倭人伝の以下の記述からも明らかである。

「女王国の東、海を渡って千余里で、また国が有り、皆、倭種である」

現香川県の東という位置関係と「倭種」という言葉から、この説明が現奈良県にあった大和国周辺を指すと分かるが､天皇陛下がおわしになる本国の説明としてはあまりに簡略的で他国であるような印象を受ける。
それにも関わらず、邪馬台国の呼称が「ヤマトこく」であるという仮説が生まれるほどに、なぜこの二国の名が似通っているのか？
これらの事象から導き出される答えは一つである。
それは、邪馬台国が大和国の存在を隠すために建国された**「第二のヤマト」**だからに他ならない。
つまり、長年常識のように呼称されてきた「ヤマタイこく」という名称は、実は本国と同じ「ヤマトこく」が正しい発音だったのだ。
ではなぜ､大和国は同音の名を持つ国家をもう一つ現香川県に作ったのか､さらに自国の存在を隠すのか？
それは外交リスク回避以外に考えられない。
大和国周辺にはまだ強力な国家が多く、それらから自国を守るためにも魏の後ろ盾は魅力的だった。それならば、使者を送って魏と外交を進めるべきだが、大きな懸念もある。
上手く魏との交渉が進んで友好関係を築ければ良いが、外交に失敗して皇帝の怒りを買えば、力を借りるどころか、逆に侵略される危険性が生じる。そう考えた大和国は自国とは離れた地に同名を冠した別国を作ることで、海外からの侵略リスクを最小限に抑えようとしたのである。
さらに､瀬戸内海の入口となる伊都国（旧周防周辺）を傘下にして見張りを置き､仮に魏の皇帝が魏船の大軍を派遣して襲来しても、そこから即座に邪馬壹國へ事態を知らせに向かう体制を整えた。
結果、万一女王国が魏に攻め落とされても真の大和国は生き残るという二段構えの防護壁を構築したのである。

ただし、私は邪馬壹國内にもう一つ、安全策を用意してあったと考えている。

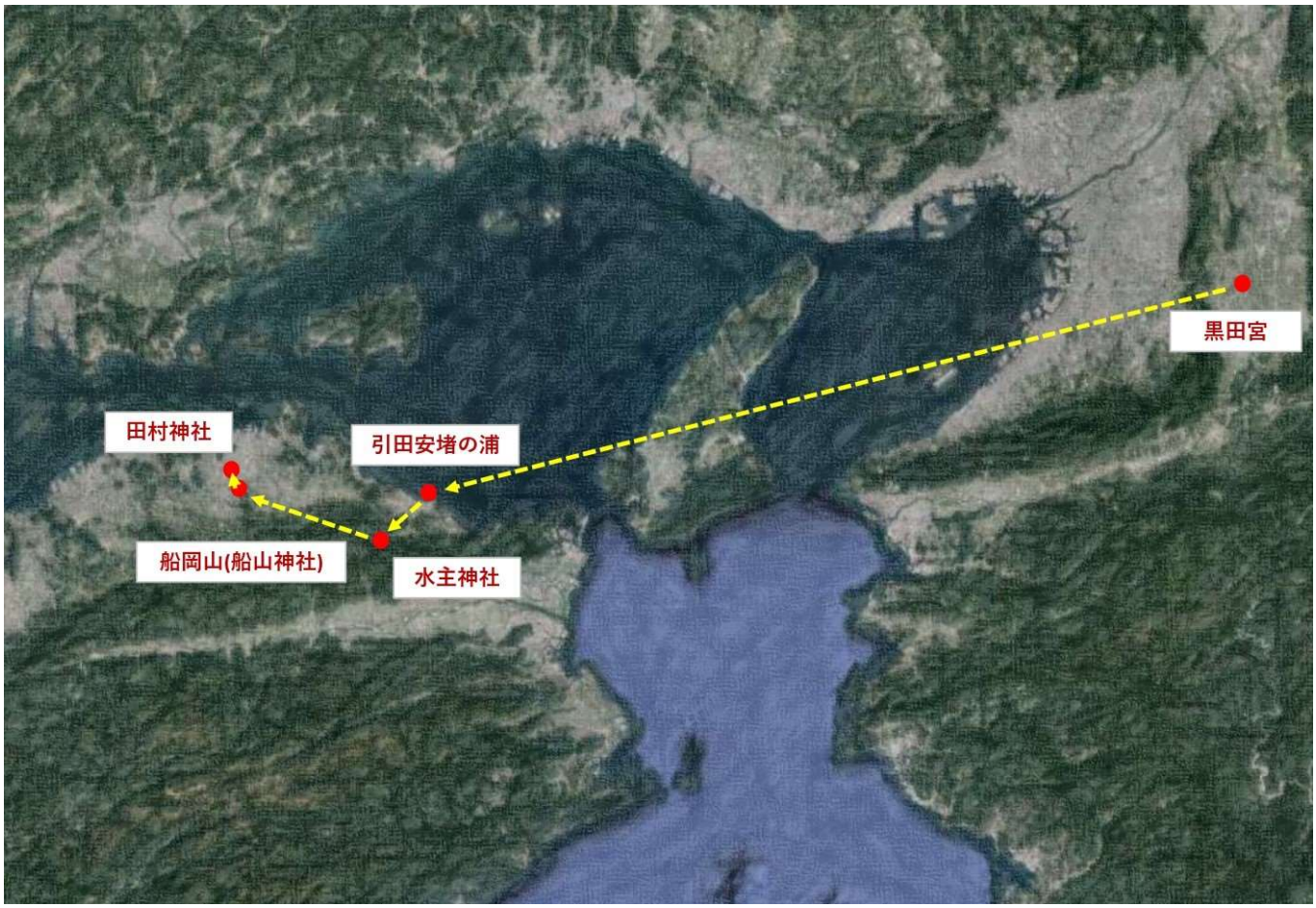
仮に魏船が邪馬壹國に攻め入る場合、当然吉野川を遡上してくるだろう。その場合は直ちに避難できる場所を確保していた。それが前章で讃岐の北側と説明した「投馬国」である。

ここを別国と装っておけば、さすがの魏もついでに攻め落とそうと考える可能性は低くなる。仮にそうなってもその決断にも時間がかかるだろう。結果的に魏兵が攻め入っても、その間に卑弥呼やその配下達、あわよくば国民の多くも北側の海から避難できるという寸法である。

なぜ、私がそのような結論に至ったかというと、以下の図でも分かるとおり、投馬国と思われる北エリアには、卑弥呼が居住していた船岡山と田村神社が含まれているからである。

おそらく、若年時代は北と南の中間地点となる水主神社に住んでいたが、高齢になって身体が老いるにつれて非常時でも即避難できるように、北の海辺に近い場所へ移り住んだのだろう。

つまり、彼女達の普段の拠点は北エリアであり、魏の使者が来た時だけ、南エリアに移動して対応していたとも考察できるのだ。



さすがにここまでの国防策は、大和国の天皇陛下や将軍達の案だと思うが、卑弥呼一人の発案なら天才としか言いようがない。ただ、こうなると第二のヤマトたる邪馬壹國を巫女が治める国にしたのも理由が分かる。

仮に邪馬壹國を大和国のように男性皇族が治める国にすると、魏との交流を深めるにつれて大和国以上に力を持ち、謀反を起こす怖れがある。それは普通の皇女を女王にしても同様で、その夫となる男が同じく本国の大和に牙を剥く可能性は否定できない。

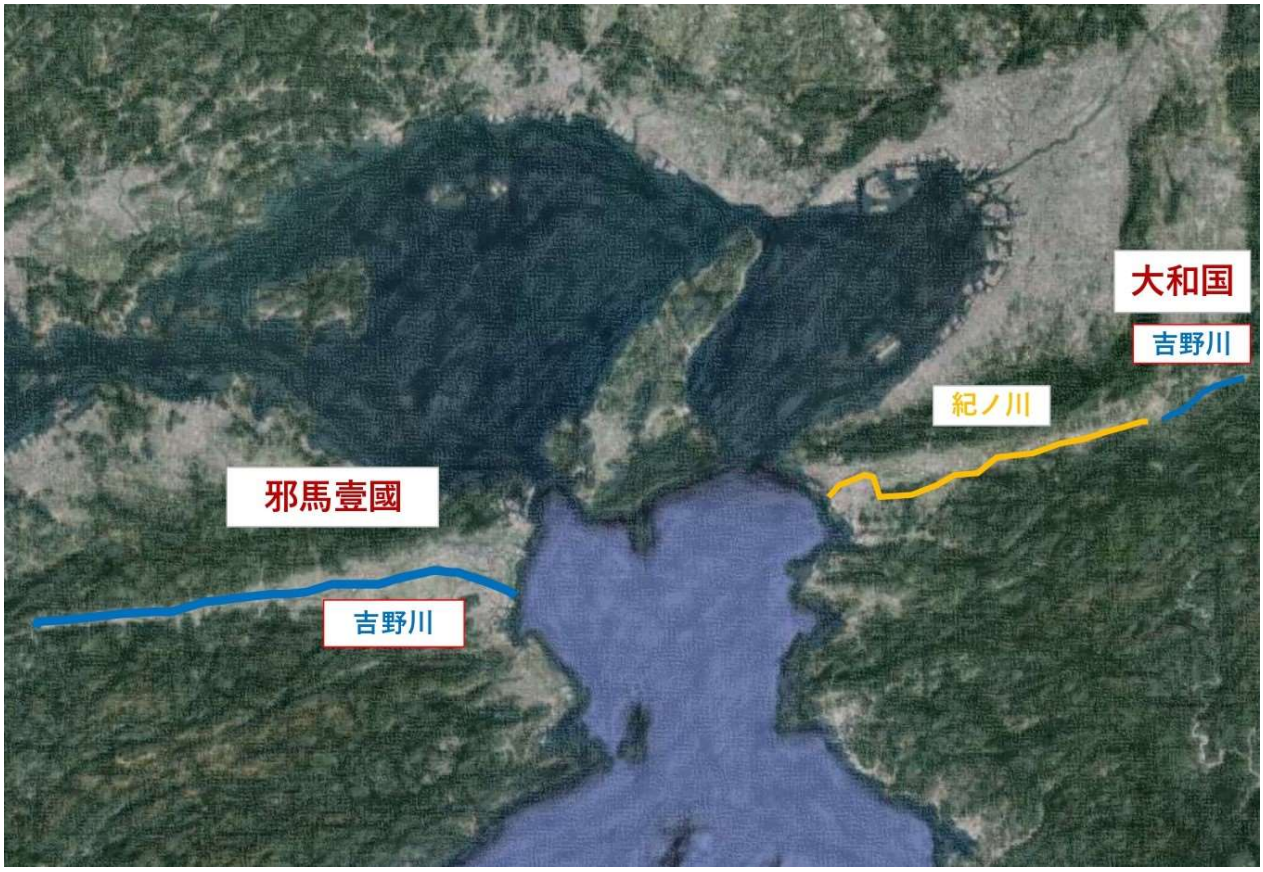
以上の理由から国を治めるほど有能で、巫女という立場から異性との交わりを持つことが許されない卑弥呼は、邪馬壹國の女王に最も相応しい人物だったと言える。それどころか、彼女は外交に特化し、海外の国から大和国と天皇陛下を守るという大任を果たすために純粋育成された女王と考えるのが妥当だろう。

このような状況により、古事記や日本書紀に邪馬壹國の成り立ちなどの記述が一切ないのは当然である。特に日本書紀は外国人が読むことを前提に書かれたものとされているため、

「邪馬壹國は海外対策用に造った仮のヤマト国であり、倭迹迹日百襲姫命は仮の女王だった」

などと書けるはずがない。

ところで、卑弥呼は故郷の大和国が相当に恋しかったらしく、思わぬところから大和国と邪馬壹國の繋がりを発見することができた。それを下図に示す。



ごらんのとおり、大和国には吉野川（和歌山では紀ノ川）が流れているが、卑弥呼がいた現香川県にも同名の吉野川が存在しているのである。実はこの川は近年まで別宮川（べっくがわ）と呼ばれており、その支流には旧吉野川もある。この川がいつの時代から「吉野」と呼ばれているかは不明だが、おそらく彼女本人が名付けたのだろう。別宮の「宮」も黒田宮を意味していると思われる。

海を隔てて対岸にある国にも拘わらず、彼女の立場上、邪馬壹國を離れることは許されなかった。

そんな彼女が望郷の念から身近の川に故郷の川と同じ名を付けたのは想像に難くない。彼女の望郷の想いはその遺体が、長年過ごした邪馬壹國ではなく、奈良県桜井市の箸墓古墳に埋葬されたことからも明白である。

卑弥呼はいつの日か、故郷に帰りたいと願っていたのだろうが、それが叶ったのは彼女の命が尽きた後だったのだ。

しかし、その功績の偉大さは、巨大な箸墓古墳の規模そのものが今でも如実に物語っている。

9. 真名

これまで現奈良県にあったヤマト国を便宜上、「大和国」と記述してきたが、この漢字による最古の表記は、西暦 757 年とされている。

ヤマトの国名を正式に表した最初の漢字は「倭」であり、卑弥呼の死後約 400 年後の元明(げんめい)天皇時代に諸国郡郷名著好字令(しょこくぐんごうめいちょこうじれい)という勅令が出され、地名の表記を漢字二文字にすることとなった。

諸説あるが、その後のヤマト表記は「日本」、「大和」と変更されたようである。

なお、最初の国名になぜ「倭」の文字を当てたのか、由来がはっきりしていないとのことだが、私が提唱した「ヤマト双國論」ではその理由は明白である。それは魏の皇帝が卑弥呼に送ったとされる「親魏倭王」の金印に刻まれていたからに他ならない。

ただし、彼女がこの金印を受け取った際、おそらく一つ重大なミスを犯した。

当然、卑弥呼は自国の名前を「ヤマト」と魏の使者に伝えていたため、この金印の文字を見た時、

「倭王」＝「ヤマトおう」

と解釈したのである。これは本国である大和国にもすぐさま伝えられ、正式に「倭」の漢字が「ヤマト」に認定された。ところが、私が調べた結果、「委」は「なよやかな女性」を意味し、それに人偏が付くことで「従順な」という意味になる。これを参考に卑弥呼の名前である「倭迩迩日百襲姫命」の持つ意味を以下のように読み解くことができる。

倭：「従順な」、または「従順に」
迩迩：迩は「行為」という意味で二つ重なると「様々な行い」……転じて「様々な政(まつりごと)」
日：「日本」……転じて「大和」
百：「多く」
襲：「襲う」ではなく、「引き受けた」または「担った」
姫命：「姫巫女(ひめみこ)」

このようにそれぞれの単語の意味を繋げると、彼女の名前は

「従順に様々な政を大和から多く担った姫巫女」

という意味で解釈できるのである。

以上を踏まえると「親魏倭王」とは「魏が親しくするヤマト国の王」という意味ではなく、

「魏が親しくする従順な女王」

となる。つまり、「倭王」とは「ヤマトの王」ではなく、卑弥呼本人のみを示す言葉だったのだ。

おそらく、それが判明したのが、約400年後の元明天皇の時代であり、遣唐使による大陸との交流が深まるにつれて、この漢字の持つ真の意味を知らされたのだろう。

なお、元明天皇は女性天皇である。

その理由については後述するが、通常は男性皇族が天皇陛下となるため、この漢字は相応しくないということになり、「倭国」から「日本国」……そして、「大和国」に表記を改めたと推察できる。

ちなみにこの元明天皇の時代に日本正史の一つである古事記が完成した。

その編纂者の一人に稗田阿礼（ひえたのあれ）という人物がいたのは周知の事実と思われるが、この人物の素性は今日まで謎とされている。

「稗田」という姓は、あの天照大御神に天岩戸からお出でいただくために舞い踊った天宇受売命（あまのうずめのみこと）を祖先に持つ一族とされており、「あれ」という男性らしからぬ名前からも、男ではなく、女性だったとの説もあるが、そもそも実在しなかったのではないか？　との説もあるほど希薄な存在である。

しかし、調べてみて驚いたが、元明天皇の諱（いみな）は、阿閇（あへ）または阿陪皇女（あへのひめみこ）だという。

阿礼（あれ）と阿閇（あへ）……この酷似した名前は何を意味するのだろうか？

件の古事記作成は先代の文武（もんむ）天皇の指示で行われたものだが、実は彼の母親こそ、元明天皇その人である。

息子の次世代の天皇がその母親とは奇妙な状況だが、文武天皇は若干25歳の若さで崩御され、本来であれば、そのご子息（後の聖武（しょうむ）天皇）が次世代の天皇となるはずだったが、わずか7歳であったため、祖母の元明天皇が皇位を預かった形なのだ。

さらに元明天皇の次の天皇は元正（げんしょう）天皇で、なんと彼女は元明天皇のご息女であり、文武天皇の姉君でもある。この世代でもう一つの日本正史である日本書紀も完成（西暦720年）していて、それを見届けるように元明天皇は翌年（西暦721年）に崩御されているのだ。

このように、本来あり得なかった女性皇族が二世代にも渡って天皇となった非常に特殊な時代であること、女性を彷彿させる国名の漢字見直し、二つの日本正史作成時に元明天皇、もしくはそのご子息・ご息女が深く関わっていること、そして、偶然とは思えないほど似ている諱から考えても、私は元明天皇こそ、稗田阿礼本人だったと確信している。

これは想像だが、特にこの時代において「女性が天皇陛下」ということは周囲の男性皇族、もしくはそれ以下の家臣からも相当に風当たりが強かったのではないだろうか？　それは現代の風潮においても同様に見て取れる。

その彼女が日本正史を完成したと言っても

「そんなものを正史とは認めない！」

と後年に破棄される可能性は充分に考えられる。

だからこそ、彼女は全く自分とは関係ない男性官人が編纂したように装ったのではないだろうか？

国名表記を正し、二つの日本正史が無事に完成したのを見届け、自身の孫が次世代の天皇となる準備を整えた彼女は、早世した愛しい息子に胸を張って逢えると、さぞや満足してあの世へ旅立ったに違いない。

10. 超特急呪物

ここまで記述するともう一つ、論じるべき品がある。それが「漢委奴国王（かんのわのなのこくおう）」の金印である。

歴史上、大陸の皇帝が日本国に与えたとされる金印は二つあり、一つは件の卑弥呼に送られた「親魏倭王」の金印……そして、もう一つがこの金印である。

しかし、これほど日本の時代考証を大混乱させているものは存在しないだろう。

この金印が発見されたのは西暦 1784 年であり、場所は筑前国那珂郡志賀島（現福岡県福岡市東区）とされている。発見者は甚兵衛（じんべえ）なる地元の百姓で、彼の農作業中に発見された。

それが郡奉行を介して福岡藩へと渡り、その後に儒学者であった亀井南冥（かめいなんめい）によって古代中国の歴史書「後漢書」に記述のある金印だと鑑定されたそうである。

ところが、この取っ手部分には、蛇形の彫刻が施されており、中国で発見されている金印と見比べると、どうやら元はラクダ型の彫刻でそれをリメイクして蛇に仕立てたのではないかとのことだ。

そのために、これは偽物だとの嫌疑をかけられ、これまた何年にも渡って議論を繰り返しているらしい。

そもそも、何の遺跡があるわけでもなく、小さな島の畑の泥の中にこんな代物が埋まっていたという状況を考えれば、その気持ちも充分に理解できる。

しかし、この金印の材質は間違いなく金であるとのことであり、偽物を作るにしても古代中国と日本との関係を学者レベルで把握していなければ到底不可能な芸当であることから、私はとても偽物とは思えない。

リメイクされたのは確かだろうが、もともと大陸側で金印を作った製作者が諸事情で取っ手だけ彫り直したとしても特に不思議ではなく、ここまで手をかけて偽物に仕上げる理由がどう考えても浮かばないため、私は本物だと確信している。

ところで、真贋以上に重要なのはこの文字列の解釈である。

現状ではこの「委」の文字は「倭」の略字であり、

「漢に朝貢する、倭の中の奴国の王」

が正しい意味だという。

私も学生時代にそのように教わった身であり、当時は何の疑問も持たなかったが、ヤマト双國論で考えると全く違う真実が見えてくる。

まず、私は前章で「倭の字は卑弥呼が魏から最初に受け取った文字」と述べたので、それが卑弥呼の生きていた西暦 200 年以降と考えると、西暦 57 年に贈られたとされるこの金印の「委」が「倭」を意味することはまずあり得ない。

そもそも、「委」が「倭」の略字であるという説自体が強引であり、漢字の専門家たる大陸人が、国家間の重要な書類に印を押す金印にそんな誤解を招く彫刻を施すとは到底考えられないのである。

「委」は「なよやかな女性」を意味すると私は述べたが、当然ながらこの字は「委任」、「委譲」、「委員」というように「委ねる」とか、「委任する」という動詞の意味もあり、転じて「承認する」に近い意味があると思われる。そして、奴国（現愛媛県）の存在については既に前章で解説済みだ。

よって、「漢委奴国王」の正しい日本の発音と意味は、

「漢委奴国王（かんいなこくおう）」と「漢は奴国王を承認する」

という非常にシンプルなものなのである。

要するに奴国は邪馬壹国より約 150 年以上前から大陸と交流していた超先進国だったのだ。

卑弥呼や大和国は奴国と大陸間の国交を見て、自分達もその恩恵にあずかるために魏と交流を始めたのかもしれない。

しかし、こうなるとこれまで常識とされてきた日本建国の歴史と辻褄が合わなくなるため、無理矢理にでも「ヤマト」と結びつけられ、加えてこの金印が発見されたのが、九州の福岡県ということもあり、尚更日本の時代考証を大混乱させる要因となっているのだ。

「それでは、この金印の正体は一体何なのか？」

という疑問が出るだろうが、この金印が発見されたという西暦 1784 年とは、日本史上最悪と呼ばれた「天明の大飢饉」の真っ最中なのである。

普通、百姓は生まれた土地で作物を耕して生活するものだが、飢饉の際には少しでも安住の地を求めて故郷を逃げ出すことは珍しくなかったらしい。

仮にこの金印を発見したという甚兵衛なる者が、盗人だったとしたらどうだろうか？

彼は餓死するよりマシと考え、たまたま古代奴国に縁のある有力者の家に眠っていた金印を百姓一揆に乗じて盗み出した。ところが、地元で売り払いたくとも、盗まれた家主が町奉行所に届け出ていれば、犯行がバレて流罪や死罪になる可能性がある。

だから故郷を捨てて遠く離れた志賀島まで流れ、その土地の畑で発見したことにした。流れ者だったからこそ、当時の志賀島の住民記録に甚兵衛の名が見つからなかった。

これなら筋が通らないだろうか？

仮にそれが真実としても、この世の地獄たる状況だったと考えると私は彼を責める気にはとてもなれない。

つまり、この金印は古代九州の歴史とはまるで無関係。

もっと言うなら、大和国とも邪馬壹国とも一切関係がないのである。

どこかの誰かが持っていた古代中国と奴国の繋がりを示す金印が、全く意図せず持ち出され、全く関係のない土地で発見されたことにされ、それを名のある江戸時代の学者が鑑定し、近年に倭と大和と邪馬壹に関する説を何とかこじつけるために曲解を押し付けられただけなのだ。

この品自体に全く罪はないのだが、私には何人もの人間の怨念と執念が絡みついた呪物にしか見えない。

11. 幻の大戦

魏志倭人伝において、以下の文は日本の歴史を語る上で無視できないものだろう。

「その国、本はまた男子を以って王と為す。住みて七、八十年、倭国は乱れ、相攻伐して年を歴る。すなはち、一女子を共に立て王と為す」

この一文は邪馬壹國と卑弥呼の成り立ちを説明するもので、単純に解釈するならば、

「その国は当初、男王を立てていたが、70、80 年の間、倭国中が戦争を繰り返した結果、女王を立てることにした」

という意味であり、これが俗にいう「倭国大乱」である。
魏志倭人伝のみならず、他の中国歴史書「後漢書」と「梁書」にも記述があり、日本列島全体を巻き込む覇権を争った大戦のような印象を受ける。
しかし、この大戦……不思議なことに古事記にも日本書紀にも一切の記述がない。
さらにいうと、どこでそのような戦があったのか、80 年間もの大戦なのに、国内にてその痕跡や言い伝えすら発見できていないのである。
果たしてそのようなことがあり得るだろうか？
さて、この検証の鍵を握る人物こそ、卑弥呼……つまり、倭迹迹日百襲姫命の弟である吉備津彦命だ。前章で述べたとおり、彼は桃太郎のモデルとして有名なのだが、もう一つ勇ましい称号がある。
それが四道将軍である。
ただし、これは一人の称号ではなく、日本書紀に登場する皇族出身の将軍で、

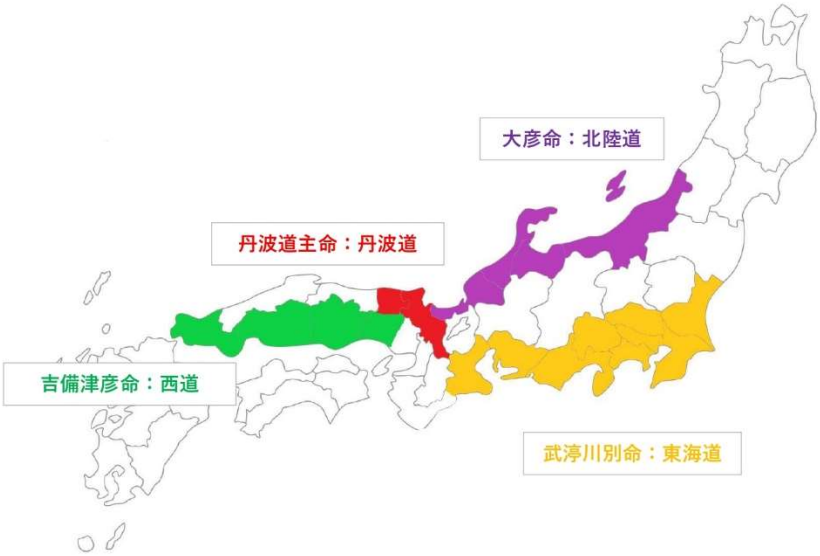
吉備津彦命は「西道（現山陽道）」
大彦命は「北陸道（現北陸地方）」
武渟川別命は「東海道（現東海地方）」
丹波道主命は「丹波道（現丹波地方）」

それぞれの道に派遣された 4 名の将軍故、「四道将軍」と呼称する。

最初は現奈良県の大和国に天皇陛下があり、次に現香川県に当たる邪馬壹國に皇女たる卑弥呼がその地を治めた。その後の崇神天皇 10 年に大和国から天皇家の血を継いだ４名の将軍が、それぞれの地方に派遣され、従わない者があれば兵を挙げて伐つように将軍の印綬を授けられ、翌崇神天皇 11 年に各地方の敵を帰順させて凱旋した。

次にそれぞれの将軍が派遣された地方を図面にて以下に示す。

ちなみに四国は既に邪馬壹國があるため、将軍を派遣する必要がないのは当然だろう。



これに続き、後世には景行天皇が九州の熊襲・土蜘蛛討伐に向かった。

その跡を継ぐように彼のご子息たる日本史上最高の英雄……日本武尊が再度九州討伐に向かい、さらに三種の神器の一つである草薙剣を携えて東国の蝦夷征伐を完遂させたのは周知の事実である。

以上がヤマト双國論を念頭に日本書紀を素直に読み解いた日本列島征服の歴史であるが、ここまで読んだ者は以下の疑問が出たことと思う。

「肝心の倭国大乱はどこに行った？」

　前述のとおり、四道将軍遠征は卑弥呼の弟である吉備津彦命が関わっており、邪馬壹国に彼女が着任した後の話となるが、ここまでの解説で倭国大乱とやらが割り込む流れがあっただろうか？
　魏志倭人伝には、いかにも卑弥呼が 80 年間もの血塗られた全国大戦の果てに任命された唯一の女王であるような記述だったが、その後に再び各地に四道将軍を送ったのか？　彼らが天皇陛下に対してクーデターを起こしたのなら分かるが、そのようなエピソードはない。
　もしや、卑弥呼が送られる前の邪馬壹国（現香川県）で着任前に大きな戦があったのかと調べてもみたが、そのような痕跡も逸話もなかった。
　以上から判断すると、

「倭国大乱などという戦は、この世に最初から存在していなかった」

　と考えるしかないのである。
　おそらく、巫女である卑弥呼が女王となった経緯を邪馬壹國の使者が、尤もらしく説明するために放ったブラフに過ぎなかったのだ。それを魏の皇帝は疑うことなく信じたということである。しかし、さすがの彼らもそれがいくつかの有名な歴史書に大々的に取り上げられ、後世にここまで日本の時代考証を狂わすことになるとは想像もしなかっただろう。
　この幻の大戦についても多くの研究がなされているが、どうしても明確な説明ができない。さらにそこら中の遺跡や古墳を掘り返してみても、明確な証拠も出てこない。
　挙句の果てには

「古事記や日本書紀に書かれていることは事実ではない」

　との意見も飛び出す有様で、これら記紀にある四道将軍の遠征についても

「史実ではない可能性がある」

　と言われる始末なのである。
　しかし、私の提唱するヤマト双國論ならば何の違和感もなく、記紀との照合が可能だ。

「それでは、九州地方でいくつも発見される大小の遺跡は何なのか！？」

　という疑問が出るだろうが、それこそ、先ほど述べた九州土着の民族たる「熊襲」または「土蜘蛛」達の痕跡だ。少なくとも卑弥呼や邪馬壹国の成り立ちには一切関わりを持たず、せいぜい景行天皇以降の影響しか受けていないことをここに断言する。

12. 銅鏡

卑弥呼と邪馬壹国を語る上で外せない最後の品……それは、やはり「銅鏡」だろう。
これが古代日本の歴史を紐解く上でなぜ重要なのかといえば､魏志倭人伝に以下の記述があるからである。

「汝に紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠鉛丹各五十斤を賜ひ、みな装ほひ封じて難升米、牛利に付す。還り到らば録して受け、悉くを汝の国中の人に示すを以って、国家が汝を哀れむを知らしむべし」

細かい物品に関する内容を省いて意訳すると、

「貴女に授けた数々の品を国中の者達に見せ示すことにより、魏国が女王を擁護していることを知らしめよ！」

という意味でその中の品に銅鏡 100 枚が含まれていたということだ。
この言葉に彼女は素直に従い、四道将軍が征服した各地の豪族に対して銅鏡を配ったのだ。
しかし、日本各地で 100 どころではない枚数が次々と発掘され、それぞれの特徴も異なるためにどれが魏から送られた銅鏡を指すのかよく分からないという現状なのである。
ちなみに最も可能性が高いと思われているモデルが、一般的に三角縁神獣鏡と呼ばれている品である。
この種類の鏡が全国で 4000 面以上見つかっているのだが、銅鏡には他にも色々種類があるため、特定するには最低以下の条件をクリアする必要がある。

①魏の時代に魏において作られたと思われる品（魏の年号の入った紀年銘鏡）
②卑弥呼が朝貢した西暦 238 年から彼女が死去する 248 年までの間に製造された品

この条件に当てはまる発掘された鏡はわずかに 7 面のみである。それらを鏡の種類ごとに数えると、

三角縁神獣鏡：4 面
（神原神社古墳：1、竹島御家老屋敷墳：1、蟹沢古墳：1、森尾古墳：1）
平縁神獣鏡：1 面（和泉黄金塚古墳）
斜縁盤龍鏡：2 面
（広峰 15 号墳：1、（伝）持田古墳群：1）

この中で斜縁盤龍鏡は年号が景初(けいしょ)4 年とあり、この年号は魏独自のもので 3 年までしかないはずである。よって、景初 4 年は存在していないと考えると日本での模造品の可能性があるためにここでは除外する。

そうすると、条件に合う最多の鏡は 4 面の三角縁神獣鏡となり、日本各地で最も多く産出すると考えると、やはりこのモデルが魏から卑弥呼に贈られた鏡だったと推測できる。

ではなぜ、その枚数を遥かに超えて、4000 面もの数が日本全国で発見されるのかというと、前章で述べたとおり、初めは四道将軍、続いて景行天皇、そして、日本武尊……彼らが日本各地を征服したのと同時にこの鏡をそれぞれの豪族に授けたとすれば、100 ごときではとても足りなくなったのだろう。そのうち、日本各地で自ら鋳造することが許された。ただし、それは周囲の国々に対し、

「我が国は大和国に属しており、我はその国の民なり！」

と証明する手形のような役割を果たすための銅鏡と思えば、量産されたのも納得だ。

やがて、その豪族達が己の子供達に対しても、成人祝いなどと称して授けるようになったとすれば、4000 面という数にも納得がいく。その際、オリジナルの鏡と区別するために年号を入れることは許されず、それらの品質にもばらつきがあったのだろう。

ちなみに日本全国で発掘される銅鏡の中には、卑弥呼より古い時代の異なる種類も発見されているが、古代中国との外交については奴国という大先輩がいることを考えると何ら不思議はない。

以上のことから、魏の年号のある 4 面の鏡は卑弥呼が直接受け取ったオリジナルである可能性が極めて高いのである。しかし、一方で、卑弥呼の受け取った鏡は三角縁神獣鏡ではないとの意見も根強い。

その根拠としては、中国全土で一枚も三角縁神獣鏡の発掘例がないからとのことだが、これも理由を説明できる。

要するに魏の皇帝は邪馬壹国の卑弥呼に対してのみ、三角縁神獣鏡を与えたのだろう。

なぜなら、卑弥呼だけではなく、その傘下となった他国も後に魏へ朝貢する可能性があり、その鏡を前述のように手形代わりにすれば、安心して女王の属国として対応できるというわけである。

むしろ、似たような鏡を無意味に量産して中国全土に広めれば、それこそ偽物を作られる危険性が生じる。

もしかしたら、かつての魏の跡地に照合サンプルとして残されたものが 1 つ, 2 つはあるかもしれないが、その事情と数から考えれば、今後発掘される可能性は極めて低いと思われる。

13. 女王の死……その後継者

私は前章まで、吉備津彦命が卑弥呼の弟であり、桃太郎のモデルと記述したが、もう一人、彼女に弟がいたのを覚えているだろうか？

魏志倭人伝において、卑弥呼には彼女を横で補佐している弟がいたと記述があるが、吉備津彦命は、自らが征服した現岡山県（吉備国）を治める役割を与えられたため、それは彼ではない。

もう一人の弟の名は稚武彦命（わかたけひこのみこと）という。

実は彼も桃太郎のモデルとされており、現香川県高松市鬼無町の熊野権現桃太郎神社では、彼が祀られている。

ここは卑弥呼が住んでいた船岡山や田村神社にも近いだけでなく、鬼無（きなし）町という独特な名称と共にかなり具体的な逸話が残っている。

かつて鬼と称する海賊達が、この近くにある鬼ヶ島 （女木島）を拠点として悪さをしていたのを彼が退治した。それ故、この地には鬼がいなくなったために鬼無と呼ぶようになったという。

これは我々が知っている桃太郎の逸話とほぼ一致することから考えても、馴染み深いおとぎ話のモデルは兄の吉備津彦命ではなく、弟の稚武彦命だったのだろう。

おそらく、生涯独り身で生きなければならない姉を憐れみ、彼女を傍で守ると誓ったのだと思われる。このように弟の手を借りつつ守護女神のごとく、諸外国から大和国を守り続けた彼女も西暦 248 年頃、命が尽きる時がきた。

魏志倭人伝には以下のような解説がある。

「卑弥呼は死に、冢を大きく作った。直径は百余歩。徇葬者は奴婢、百余人である」

この墓の大きさについても、前章で述べた笠井新也氏が箸墓古墳の大きさの検証を行っており、その規模も一致している。これも倭迹迹日百襲姫命が卑弥呼である根拠として挙げておく。

ところで、この箸墓古墳という奇妙な名前……その由来は日本書紀に記述された倭迹迹日百襲姫命の逸話によるものである。

「姫は大物主神の妻となったが、彼は夜だけで昼に姿を見せなかった。彼女がその姿を見たいと願うと、翌朝彼は小蛇の姿で現れた。姫はそれに驚いて悲鳴をあげたため、彼は恥じて三輪山へ帰ってしまった。彼女はこれを後悔して腰を落とした際、箸が陰部を突いたために亡くなった。人々はその逸話にちなんで彼女の墓を箸墓と呼ぶようになった」

この話を聞いて大半の者は首を傾げると思う。

蛇に驚いて頭をぶつけて亡くなったとか、毒蛇に噛まれて毒で亡くなった……ならいざ知らず、よりにもよってなぜ箸が陰部に刺さるのか？

これについては、故人の秘め事を暴くようでいささか気が引けるのだが、彼女を取り巻く環境から考察できるのは以下のとおりだ。

大和国から祖国を守るように命じられ、神の妻たる巫女という立場上、生涯現世で人間の男と交わることさえ禁じられた彼女……しかし、どう足掻いても、健康的な一人の女性であることに変わりはない。そんな彼女は箸を使って自慰行為に及ぶのが日課だった。

日本書紀の逸話をそのまま信じるのであれば、ある時に行為中、小さな蛇が自室に迷い込んだ。それが急に視界に入った彼女は動転し、勢い余って陰部を弄っていた箸をそのまま深く突き刺してしまった。その傷が深すぎて出血多量で亡くなったのか、それとも、ばい菌が入って感染症で亡くなったか定かではないが、大方そんなところだろう。

しかし、即死したとは思い難いため、卑弥呼本人が己の名誉を守るために、死に際までそんな方便を吐いたのは容易に想像がつく。誠に悲惨としか言いようないが、いかに偉人であろうとも死に方は選べないということだ。

魏志倭人伝にはその後日談も書かれている。

「新たに男王を立てたが、国中が不服で互いに殺しあった。当時千余人が殺された。また、卑弥呼の宗女、壹与（とよ）、年十三、を立てて王と為し、国中が遂に治まった」

この文章を読む限り、卑弥呼亡き後の邪馬壹国では相当に血生臭い戦争が起こったようだ……が、これまで私の解説を読んだ者達には何か違和感を覚えないだろうか？

前述したように、古事記にも日本書紀にもこの国に関する直接的な記述はないため、現香川県の逸話や伝説、遺跡を参考にするしかないのだが、倭迹迹日百襲姫命が亡くなった後にそのような内乱が起こったとの記録も痕跡もない。普通に考えれば、卑弥呼の後の男王とは稚武彦命を指すと思われるのだが、彼がそのような地位についた伝説もない。

確かとは言えないが、これも邪馬壹国の使者が放ったブラフとしか思えないのだ。

それに先ほどの文にあった「徇葬者は奴婢、百余人である」も私は非常に疑問に思っており、古代中国において王や皇帝が死ぬと多くの奴隷や犯罪者を殉死させるという話は聞いたことがある。しかし、私の認識の範囲で日本の古墳でそのような徇葬者の人骨が多数発見されたという話を聞いたことがない（代わりに埴輪を多数置くと聞いたことはあるが……）。

つまり、これも彼女の偉大さをアピールするために使者が放ったハッタリではないだろうか？

箸墓古墳をすべて暴かない限り断言はできないが、願わくは我が国の祖先達がそのような愚行を犯していないと祈りたい。

しかし、それより気になるのは後継者となった宗女、壹与である。

倭迹迹日百襲姫命が卑弥呼であり、老齢となった後を 13 歳の若さで継いだ巫女的素質を持った女性。そして、その名前。

これだけの情報があれば、特定は容易である。

それは卑弥呼の甥っ子にあたる崇神天皇のご息女……豐鍬入姫命（とよすきいりひめのみこと）以外ない。

しかし、現香川県の逸話を調べても、彼女が卑弥呼の後を継ぎ、そこで政治を行ったという記録はなく、日本書紀にて確認できたのは、天照大御神を祀るに相応しい新たな地を探すように父親の崇神天皇から命じられ、摂津→大和→丹波→大和→紀伊→吉備と長旅をしたという逸話だけである。

結局、彼女は適地を見つけられず、その役割を引き継いだ倭姫(やまとひめ)が現在の伊勢の地に辿り着き、後の伊勢神宮となったのだ。

その後の邪馬壹国がどのような経緯を辿ったのか……その調査は興味のある方々にお任せする。

14.「皇」たる証

2023 年 1 月 25 日……

奈良県奈良市にある日本最大の円墳、富雄丸山古墳にて、これまでに類を見ない品が出土したと奈良県橿原市の県立橿原考古学研究所によって初めて公開された。

この古墳は 4 世紀後半に造られたものとされ、直径 109m にも及ぶが、そこに埋葬されていた人物の正体は現時点でも謎とされている。

その中に長大な鉄剣が木製の鞘に納められていたというのである。

何より驚かされるのはその長さと形状で、全長はなんと、237cm にも及び、さらに大蛇がうねる様を模したような蛇行剣とのこと。

蛇行剣の出土自体は珍しいわけではなく、全日本の遺跡にて数十例はあるのだが、それらの全長はせいぜい 70cm 程度で、2m を超える長大な品は前例がない。

さらに、同じ場所でこれまた衝撃的な品が発掘された。

なんと長さ 64cm、幅 31cm にも及ぶ国内最大の銅鏡である。しかも、その形体も一般的な円形や四角形ではなく、特徴的な盾形というのだから、考古学界隈は未曽有の大混乱に包まれているのだ。

私もこのニュースを見た時には非常に驚いたが、この謎が解明するには、また何十年という時間が必要だろうと漠然と思っていた。

しかし、これまで述べてきたヤマト双國論をきっかけに邪馬壹国と卑弥呼の謎を追求した結果、この蛇行剣と盾形銅鏡、そして、この品の持ち主まで全ての謎が解けてしまったのである。

まず、日本最大の円墳。

そして、中には長大な鉄剣が収められていたという事実から、この古墳の主は男性であると推察できる。

それも最大の長剣を持ち、最大の銅鏡を所有するに相応しい体躯と途轍もない武功を果たした男……

私の頭の中でそんな人物は、たった一人しか思いつかなかった。

しかし、私が知っている彼の佩刀は、このような巨大鉄剣ではないはずだった。そして、そのような大きな銅鏡を持っていたという認識もなかった。私は当然のごとく、日本正史たる古事記と日本書紀を改めて開いた。

驚くべきことに、その答えは記紀にすべて記されていたのである。

古事記にはこのようにある。

「吉備臣等の祖先、御鉏友耳建日子を一緒に遣わせ、比比羅木之八尋矛を授けられた」

日本書紀にはこのようにある。

「そのとき、大きな鏡を船に掲げて、海路から葦浦に回った。玉浦を横切って蝦夷の支配地に入った」

古事記と日本書紀。
別々の正史に記述されてはいるが、この二文の主語に該当するのは同一人物である。
その御方こそ、伝説の英雄にして、我が国「日本」の名を冠する唯一の人物……**「日本武尊」**に他ならない。この事実を知ったときの私の感動が想像できるだろうか？
詳しく説明すると、比比羅木之八尋矛は「八尋」という名のとおり、非常に長大な矛であり、彼は父親の景行天皇から東国征伐の際に授けられた。

「矛と蛇行剣は全くの別物だ！」

という者も多いだろう。
それについては橿原考古学研究所が公開した実物のＸ線写真を見てほしい。
私のように日本刀に興味を持っている者達には半ば常識であろうが、せいぜい刃長 70㎝ 程度の日本刀さえ、その柄長は 25㎝ 程度である。これが 90㎝ 以上の野太刀、大太刀になるにつれて柄長はどんどん伸びる。
例を挙げると、「柳生の大太刀」と呼ばれる刀は、刃長 145㎝ に対して、柄の長さは実に 70㎝ に達するのである。これぐらいの柄の長さがないと武器として扱えないのだ。
しかし、件の蛇行剣の下端を見ると刀身と柄が一体となっている共鉄（ともがね）造りであり、どう見ても拳一握り分程度の柄しかない。このような柄の長さでは振り回すどころか、持ち運びすら困難だろう。
つまり、いまだ全貌が明らかになっていないが、これは蛇行している部分すべてが刀身なのではなく、中間に握り部分のある長巻や薙刀、または鉾に近い武器なのだ。
もう一つ無視できないのが、4 世紀後半の日本にこのような長大な鉄鉾を作る技術が存在したのかということである。千葉・市原の稲荷台古墳から算出した最古の「王賜銘鉄剣」さえ、5 世紀後半であり、この蛇行剣は明らかにオーバーテクノロジーなのだ。
しかし、私はこの武器の来歴にすら心当たりがある。
前章で私が示した魏志倭人伝において気になる一文が書かれていた。

「汝に紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠鉛丹各五十斤を賜ひ、みな装ほひ封じて難升米、牛利に付す。還り到らば録して受け、悉くを汝の国中の人に示すを以って、国家が汝を哀れむを知らしむべし」

この記述は卑弥呼が魏の皇帝から授けられた品々。
100 枚の銅鏡に加えて、「二口の五尺刀」……「刀」とはあるが、長さから考えてもこれは腰に差す日本刀のようなコンパクトな品ではなく、長巻や薙刀の部類だ。私は比比羅木之八尋矛とは、この刀の一口と確信している。

「五尺ということは約 150㎝ 程だから、237㎝ の蛇行剣とは全く違う！」

という意見が出そうだが、これも刀剣を知る者なら常識で刀の長さを示すのは通常、全長ではなく、刃長なのである。

古代中国での長さの単位「尺」は、23、24㎝程度であるらしい。

そう考えると、この五尺刀とは刃長約120㎝に対し、柄も約120㎝の鋼でできた世にも珍しい共鉄の大刀なのである。

では、なぜに蛇行しているのか……

三国志が好きな者なら頭に思い浮かばないだろうか？

特徴的に蛇行した刃を持つ矛、「蛇矛（だぼう）」を縦横無尽に振るったとされる古代中国武将、張飛の姿を。

この蛇行の刃は敵の傷口を広げ、よりダメージを大きくさせることに特化したものなのだ。

「蛇矛が三国志で使われたというのは後世の創作だ！」

という意見もあるだろう。

三国志には3世紀に書かれた西晋の陳寿による歴史書の「三国志」とこれを元に13世紀に書かれた明の羅貫中らによる「三国志演義」の二つが存在する。かの有名な関羽の青龍偃月刀（せいりゅうえんげつとう）や張飛の蛇矛は三国志演義にしか見られないため、それは史実ではなく、その証拠の品もないというのが常識だ。

しかし、13世紀の書誌に単なる絵空事が描かれているだろうか？　火のない所に煙は立たぬというが、当時の歴史書に記述がないだけで、明の時代では口伝にて語り継がれていたのではないか？　古事記や日本書紀を見れば分かるが、根も葉もない事柄なら最初から書いたりしないのである。

この武器を作るには大量の燃料と材料と人員と時間、そして、高度な設備と技術が必要のため、雑兵ごときが所持して良い武器ではなく、まさに将軍や王、または皇帝の証であり、彼らが敗北すれば完膚なきまでに破壊されたと考えられる。数量から考えても後世に実物が残らなかったのはなんら不思議ではない。

つまり、私の結論では古代中国にもこの蛇矛は確かに実在したという他ないのである。

魏の皇帝はこれらの品を国中に示し、卑弥呼が魏に擁護されていることを知らしめよと述べた。

その言葉を卑弥呼から伝え聞いた崇神（すじん）天皇も垂仁（すいにん）天皇も、そして景行天皇も忠実にそれに従って日本列島を征服した。最後にそれを託されたのが、日本武尊だったのである。

さて、魏志倭人伝にはもう一つ気になる箇所があった。「二口」と……つまり、もう一つの蛇行剣がどこかに存在するということである。

私が景行天皇の立場で一つを東国征伐に向かう息子に手渡したのなら、もう一口は自らの神器として傍らに置く。しかし、これまでにこのような長大な蛇行剣があったという記録はない。

結論として、もう一口の蛇行剣は景行天皇以降の天皇陵のどれかに眠っているとしか考えられないのだ。

これについては、未来の有望な考古学者達にぜひとも発掘していただきたい。

最後に、この巨大盾型銅鏡については正直、魏で作られたものか、日本で作られたものか定かではない。

もし、魏で作られたものなら、前章で述べた三角縁神獣鏡のように魏の年号が入っているはずだが、それなら既に橿原考古学研究所が発表していると思われるため、おそらくはないのだろう。

そう考えるとこれは日本で鋳造された可能性が極めて高い。

そして、従来の丸型ではなく、底が平の巨大盾形銅鏡であるのも高台に置いて周囲の蝦夷達に彼らの威光を示すためだったのだ。いずれにしろ、途轍もない宝鏡であることに違いはない。

つまり、この比比羅木之八尋矛と鼉龍文盾形銅鏡（だりゅうもんたてがたどうきょう）と名付けられた品は国宝などというレベルではなく、「三種の神器」に次ぐ神器なのである。

このように私の提唱する「ヤマト双國論」であれば、最新の発見さえ矛盾なく説明でき、思わぬ史実さえ解明可能なのである。

15. 神代から現代へ

記紀によると、日本武尊は東国征討を果たした後、尾張に入ってかねてより婚約していた美夜受比売と結婚する。

そして、三種の神器たる「草薙剣」を彼女に預けたまま、伊吹山（岐阜・滋賀県境）の神を素手で討ち取ろうとするが、その後に病を患って能褒野（三重県亀山市）にて死に至った。そして、父親である景行天皇は彼を能褒野陵に葬るよう、家臣に指示をする。

「それなら、三重県に彼のご遺体があるのではないか？」

という意見があるだろう。

確かに亀山市には能褒野王塚古墳があり、ここが日本武尊の墓所とされている。

だが、日本書紀には興味深い後日談がある。

「死後の日本武尊は白鳥となって、大和を指して飛んだ。棺には衣だけが空しく残され、屍骨はなかった。そして、その白鳥は大和琴弾原（奈良県御所市）→ 河内古市（大阪府羽曳野市）と通過して空に消えていった」

古事記はおとぎ話のようなファンタジー要素が多い印象だが、日本書記はかなり淡々と事実を記述している印象が強かったにも拘わらず、日本武尊の死については、いきなりファンタジー要素が組み込まれているのだ。それに「棺には衣だけが空しく残され、屍骨はなかった」とある。

私は彼に何か途轍もなく深い事情、または事件が起こり、それを隠すためにこのようなファンタジー要素満載の逸話が組み込まれたと思っている。要するに彼は死んでおらず、何らかの目的があって大和国に戻り、その目的を果たした後で亡くなったのではないだろうか。

現に奈良県御所市と大阪府羽曳野市にも彼の墓所は存在しているが、実際に葬られたのは富雄丸山古墳だったというわけだ。その理由は謎のままである。

最後に一つ、「ヤマト」という名称について。

この言葉は前述のとおり、倭、日本、大和等々……いくつもの種類の漢字で表現されているのだが、元々の語源は何だったのだろうか？

諸説あり、「山のふもと」、「山に囲まれた地域」、「山跡」といまだに定まっていない。おそらく「山」であることに間違いはないだろう。

大和国には天香具山（あまのかぐやま）、畝傍山（うねびやま）、耳成山（みみなしやま）の「大和三山」という山々があり、この中の畝傍山に初代神武（じんむ）天皇陵がある。このように大和国はそれほど「山」が主の国なのだ。

それでは、「と」は何を意味するのか？

邪馬壹国の「壹」は本来、「いち」と読み、「と」とは読まない。そのために、

「邪馬壹国（やまいちこく）と読む」

という説が生まれたのだが、これを「と」と発音することは明らかなので「壹」は書き間違いなのである。

では、正しい漢字は何だったのか？　この字に似ていて、「山」に関する漢字を私は考えてみた。

すると答えは自ずと見えてくる。正解は、

山に登る……つまりは「山登（やまと）國」

これが正しい意味なのである。

それを裏付けるように倭迹迹日百襲姫命の名称は日本書紀の記述であり、古事記においての名は、

「夜麻登登母母曾毘売命」

と書く。こんなところにも謎を解く重要な鍵が残されていたのだ。

さて、以上が卑弥呼と邪馬台国の真実である。

昨今の日本国は度重なる災害や人災により、多くの国民が自国に対して誇りと信頼を失っている状況にあるが、我々はこの国が孤高なる女王が生涯をかけて守り抜いた末に紡がれた皇国である事実を忘れてはならない。

しかし、そろそろ従順な**「倭国」**から日の光が差す真の**「日本国」**へ再起したいものである。